尋常小學國史附圖

第五學年用

教科書文庫
4
210
31-1925
0130458332

43256
教科書文庫
4
210
31-1925
01304
58332

中央図書館

教科書文庫
4
210
31-1925
0130458332

尋常小學國史附圖

第五學年用

廣島高等師範學校訓導 菊地勝之助編

登録番号
26513
分類 375.9
K

広島大学図書
0130458332

教育圖書出版社藏版

この附圖を使用する方へ

一この附圖は尋常五學年の國史の自習用としてつくつたもので、年代圖・繪畫・寫眞・地圖・系圖並に自習問題・語句の解釋・表解等は、すべて國史教科書と密接な連絡をとつて選び、これを一課毎にまとめて自習のしやすいやうにしたものです。

一この附圖の繪畫・寫眞・地圖・系圖等は、みんなよりどころのあるもので、しかも趣味に富むものを選んで國史教科書を學ぶ助けとなるやうに仕組みました。國史を調べる場合に、十分この附圖と引き合せなさい。

一卷頭の年代圖は尋常小學國史(上・下)に現はれた主なる歴史のことがらをそれ〴〵年代順にならべ、その上世界の歴史と照し合せて、人物の活動した時代なり、事件のあつた年代

なりが一目ではつきりわかるやうになつてをります。教科書で人物なり事件なりを學んだ際には、必ずこの年代圖によつてたしかめるやうにしなさい。

一卷末にかかげた自習問題・語句の解釋・及び表解等は、共に國史の豫習・復習の用にそなへたものです。

自習問題は其の課の主なる歴史事項を問題として出したものですからこれによつて習つたことをまとめて御覽なさい。

語句の解釋は教科書の難語句をぬき出して解釋を加へてありますから、教科書を豫習する場合に字引となります。

表解は其の課の大要をつまみ出して簡明に書き分けたものですから、國史を記憶する時の參考になります。

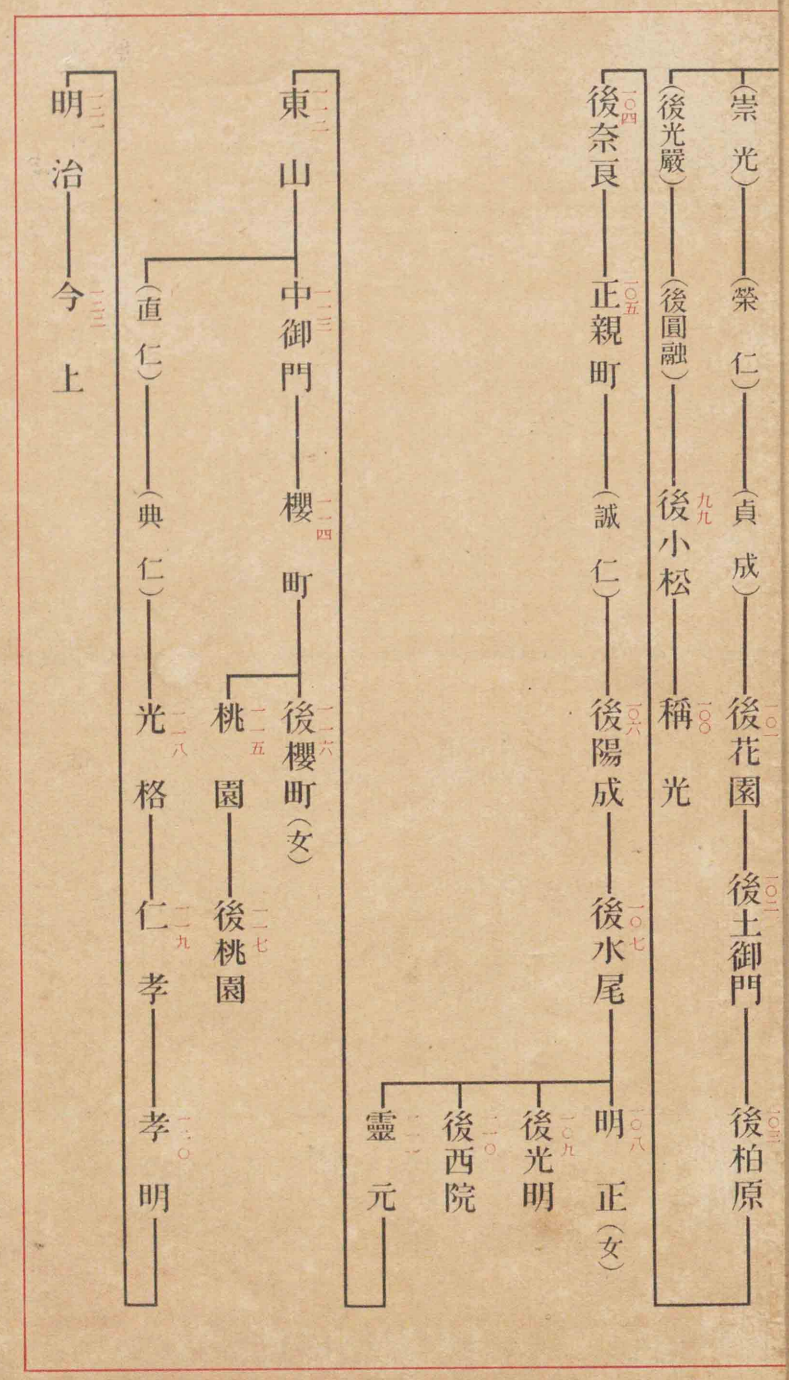
尋常科第五學年

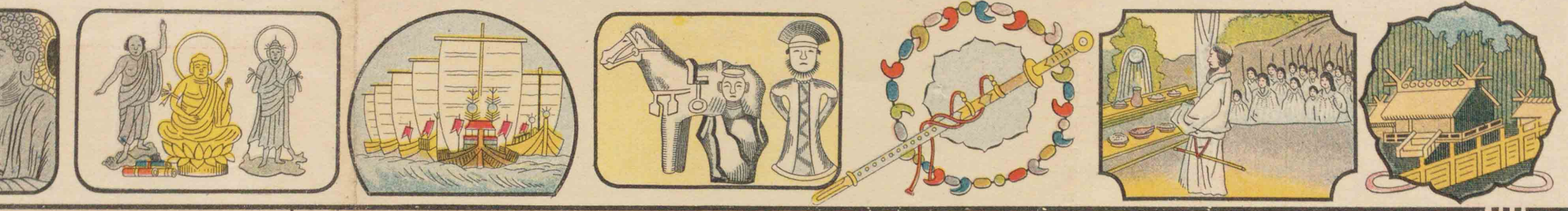
小學國史附圖

目次

第一　天照大神……一
第二　神武天皇……二
第三　日本武尊……三
第四　神功皇后……四
第五　仁德天皇……五
第六　聖德太子……六
第七・八　天智天皇と藤原鎌足……七
第九　聖武天皇……八
第十　和氣清麿……九
第十一　桓武天皇と坂上田村麿……一〇
第十二　弘法大師……一一
第十三　菅原道眞……一三
第十四　藤原氏の專横……一三
第十五　後三條天皇……一四
第十六　源義家……一五
第十七　平氏の勃興……一六
第十八　平重盛……一七
第十九　武家政治の起（一）（二）……一八・一九
第二十　後鳥羽上皇……二〇
第二十一　北條時宗……二一
第二十二　後醍醐天皇……二三
第二十三　楠木正成……二三
第二十四　新田義貞……二四
第二十五　北畠親房と楠正行……二五
第二十六　菊池武光……二六
第二十七　足利氏の僭上……二七
第二十八　足利氏の衰微……二八
第二十九　北條氏康……二九
第三十　上杉謙信と武田信玄……三〇
第三十一　毛利元就……三一
第三十二　後奈良天皇……三二
卷末　自習問題……三三

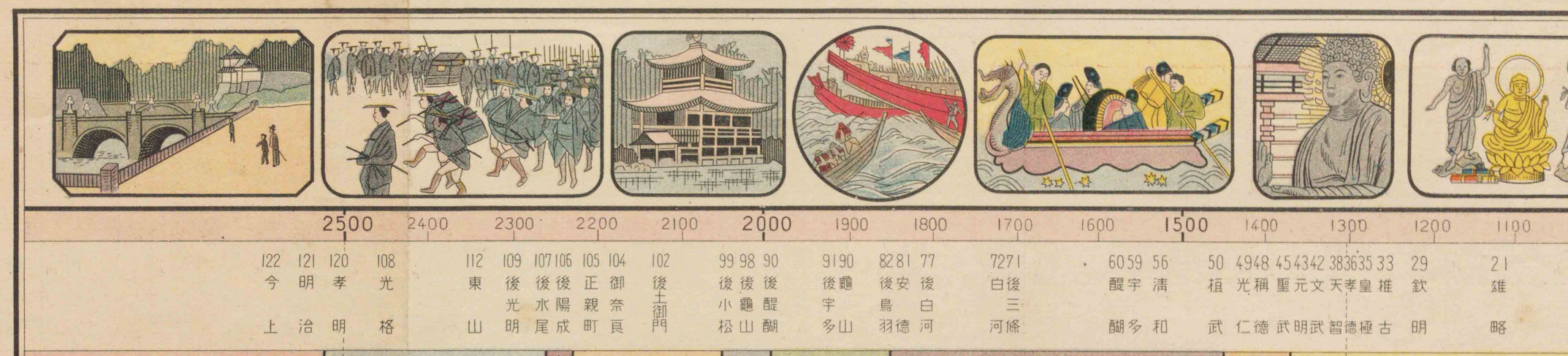
卷頭　歷史年代表・御歷代御系圖
天皇御在位將軍在職對照表





皇紀	御歷代	時代	主ナル紀元年數	歷史事項	世界 支那	歷史事項	西歷
800 1200 1100 1000 900 800 700 600 500 400 300 200 100							
33 36 35 33	孝德	代			隋		六
29	皇極				南北朝	マホメット	
21	舒明						五
16	雄略				晉	西ローマ帝國滅亡 500	四
15	仁德				兩		
14	應神	時			國三		三
12	仲哀		神功皇后新羅征伐(八六〇)	武內宿彌	漢後	赤壁ノ戰	二
11	景行			日本武尊		諸葛孔明	
10	垂仁					佛教支那ニ傳來	一
10	崇神	大和時代(文教傳來時代)		四道將軍	漢前	キリスト(1)	世紀(前)一
						新羅高麗百濟起ル	
					秦	高祖	二
						張良	
						韓信	
						秦始皇帝	三
						萬里長城	
					(戰國時代)	廉頗	四
						藺相如	
						孟子	
						ソクラテス	五
					(春秋時代)	釋迦	六
						孔子	
					周	(スパルタ全盛)	七
					(殷夏)		八
							九
						(埃及ノ興隆)	十
1	神武		神武天皇御即位(紀元一)	大和平定			
	(天照大神)	神代		(素戔嗚尊)(天孫降臨)(大國主命)			

第十二 弘法大師……二七
第十三 菅原道眞……二八
第十四 藤原氏の專橫……二九
第十五 後三條天皇……三〇
第十六 源義家……三一
第十七 平氏の勃興……三二
第二十八 足利氏の衰微……三三
第二十九 北條氏康……三三
第三十 上杉謙信と武田信玄……三三
第三十一 毛利元就……三三
第三十二 後奈良天皇……三三
卷末 自習問題……三三



2500 2400 2300 2200 2100 2000 1900 1800 1700 1600 1500 1400 1300 1200 1100

122 今上 121 明治 120 孝明 108 光格 112 東山 109 後光明 107 後水尾 106 後陽成 105 正親町 104 御奈良 102 後土御門 99 後小松 98 後龜山 90 後醍醐 91 後宇多山 90 後龜山 82 後鳥羽 81 安徳 77 後白河 72 白河 71 後三條 60 醍醐 59 宇多 56 清和 50 桓武 49 光仁 48 稱德 45 聖武 43 元明 42 文武 38 天智 36 孝徳 35 皇極 33 推古 29 欽明 21 雄略

現代 | 江戸時代 | 安土桃山時代 | 室町時代 | 吉野時代 | 鎌倉時代 | 平安時代 | 奈良時代 | 傳來時代

徳川氏 | 織田氏 豐臣氏 | 足利氏 戰國時代 | 北條氏 | 源氏 平氏 | 藤原氏

米國使節來朝（二五一三）
通商條約（二五一八）
大政奉還（二五二七）
足利幕府滅亡（二三三三）
秀吉海內統一（二三五〇）
朝鮮征伐（二三五三）
關ヶ原役（二三六〇）
德川家康征夷大將軍トナル（二六〇三）
應仁ノ亂（二四六七）
足利義滿征夷大將軍トナル（二〇五二）
建武中興（一九九三）
源頼朝征夷大將軍トナル（一八五二）
奈良奠都（二三七〇）
平安奠都（二四五四）
大化改新（二三〇五）

日露國交復活
皇太子攝政
皇太子歐洲漫遊
南洋諸島委任統治
日獨戰爭
今上天皇ノ踐祚
明治天皇ノ崩御
日韓併合
日露戰爭
日清事變
日英同盟
條約改正
日清戰爭
帝國議會開設
教育勅語下賜
憲法發布
臺灣征伐
武家政治ノ終
西南ノ役
明治維新
攘夷論
外艦ノ渡來
德川齊昭
國學ノ勃興
尊王論
高山彦九郎
本居宣長
蒲生君平
松平定信
元祿時代
德川吉宗
新井白石
大石良雄
德川綱吉
德川光圀
德川家光
島原ノ亂
北條氏康
南蠻人ノ渡來
基督教ノ傳來
上杉謙信
毛利元就
織田信長
豐臣秀吉
德川家康
武田信玄
足利義滿
北條氏滅亡
楠木正成
北畠親房
菊池武光
新田義貞
楠木正行
北條時宗
元寇
保元平治ノ亂
平清盛
源頼朝
武家政治ノ起
承久ノ變
平重盛
源義家
菅原道眞
朝臣ノ榮華
武士ノ起
和氣清麻呂
坂上田村麻呂
弘法大師
光明皇后
大寶律令
藤原鎌足
聖德太子
佛教傳來

中華民國 | 清 | 明 | 元 | 宋 | 五代 | 唐 | 隋 | 南北朝 | 晉

2000 1500 1000 500

米國獨立宣言
ペスタロチ
ウンントン
汽船汽車發明
ナポレオン
ビクトリヤ女帝
リンカーン
スエズ運河開通
普佛戰爭
支那大革命
歐洲大戰
ベルサユ平和會議
華盛頓會議
フランクリン
紡績機械發明
ルイ十四世
ベートル大帝
ニウトン重力法則發見
顯微鏡發明
望遠鏡發明
宗教改革
コロンブス アメリカ發見
東ローマ帝國滅亡
印刷術發明
李氏朝鮮起
忽必烈
マルコポーロ
鐵木心
朱子
高麗起ル
玄宗
新羅半島起ル
マホメット
西ローマ帝國滅亡

一九二〇 一九一九 一八一八 一七一七 一六一六 一五一五 一四一四 一三一三 一二一二 十一 九一 八一 七一 六一 五一

御歷代御系圖

- 神武 一
  - 綏靖 二
    - 安寧 三
      - 懿德 四
        - 孝昭 五
          - 孝安 六
- 孝靈 七
  - 孝元 八
    - 開化 九
      - 崇神 一〇
        - 垂仁 一一
          - 景行 一二
- 日本武
  - 仲哀 一四
    - 應神 一五
- 成務 一三
- 仁德 一六
  - 履中 一七
    - （市邊押磐）
      - 仁賢 二四
        - 武烈 二五
  - 反正 一八
    - 允恭 一九
      - 安康 二〇
        - 雄略 二一
          - 清寧 二二
            - 顯宗 二三
            - 安閑 二七
            - 宣化 二八
            - 欽明 二九
              - 敏達 三〇
              - 用明（廐戶） 三一
              - 推古（女） 三二
              - 崇峻 三三
- （莵道稚郎子）
- （稚淳毛二派）
- （意富富杼）
- （宇非）
- （彥主人）
- 繼體 二六
- （押坂彥人大兄）
  - 舒明 三四
    - 天智 三八
      - 持統（女） 四一
      - 弘文 三九
      - 元明（女） 四三
      - （施基）
        - 光仁 四九
          - 桓武 五〇
    - 天武 四〇
      - （草壁）
        - 元正（女） 四四
        - 文武 四二
          - 聖武 四五
      - 皇極（女） 三五 三七
        - 齊明 三七
      - （茅渟）
        - 孝德 三六
          - 舍人
            - 淳仁 四七
              - 稱德（女） 四八
              - 孝謙 四六
- 平城 五一
  - 文德 五五
    - 清和 五六
      - 陽成 五七
        - 朱雀 六一
- 嵯峨 五二
  - 仁明 五四
    - 光孝 五八
      - 宇多 五九
        - 醍醐 六〇
          - 村上 六二
- 淳和 五三
- 冷泉 六三
  - 花山 六五
- 圓融 六四
  - 三條 六七
  - 一條 六六
    - 後一條 六八
      - 後冷泉 七〇
      - 後朱雀 六九
        - 後三條 七一
          - 白河 七二
            - 堀河 七三
- 後深草 八九
  - 伏見 九一
    - 後伏見 九三
      - （光嚴）
      - 花園 九五
- 鳥羽 七四
  - 崇德 七五
  - 後白河 七七
    - 二條 七八
      - 六條 七九
    - 高倉 八〇
      - 安德 八一
      - （守貞）
        - 後堀河 八六
          - 四條 八七
      - 後鳥羽 八二
        - 土御門 八三
          - 後嵯峨 八八
          - 順德 八四
            - 仲恭 八五
  - 近衛

天の岩屋
本圖は天の岩屋の前で神々樣が集つて神樂を行はせ給ふ

對照表

天皇御在位
將軍在職

- 一 鎌倉時代
  - 文治元(一八五)
  - 後鳥羽 — 土御門 — 順德 — 仲恭 — 後堀河 — 四條 — 後嵯峨 — 後深草 — 龜山 — 後宇多 — 伏見 — 後伏見 — 後二條 — 花園 — 後醍醐
  - 源頼朝 — 頼家 — 實朝
  - 藤原頼經 — 頼嗣 — 宗尊親王 — 惟康親王 — 久明親王 — 守邦親王
  - 弘元(一三九九)
- 二 吉野時代
  - 建武元(一四九九)
  - 後醍醐 — 後村上 — 後龜山
  - 中元(一五〇二)
- 三 室町時代
  - 明德(一五〇二)
  - 後小松 — 稱光 — 後花園 — 後土御門 — 後柏原 — 後奈良 — 正親町
  - 永祿(一五二二)
  - 足利義滿 — 義持 — 義量
  - 義教 — 義勝
  - 義政 — 義尚 — 義稙 — 義澄 — 義晴 — 義輝
- 四 安土桃山時代
  - 永祿(一五二二)
  - 正親町 — 後陽成
  - 慶長(一五九六)
  - 義榮 — 義昭
- 五 江戸時代
  - 慶長(一五九六)
  - 後陽成 — 後水尾 — 明正 — 後光明 — 後西院 — 靈元 — 東山 — 中御門 — 櫻町 — 桃園 — 後櫻町
  - 德川家康 — 秀忠 — 家光 — 家綱 — 吉宗 — 家重 — 家治
  - 後桃園 — 光格 — 仁孝 — 孝明
  - 明治(一八六八)
  - 家宣 — 家繼 — 家治 — 家齊 — 家慶 — 家定 — 家茂 — 慶喜

- 東山 — 中御門 — 櫻町 — 桃園 — 後櫻町(女)
- 後櫻町(女) — 後桃園
- 桃園 — 後光明 — 後西院 — 靈元
- 後光明 — 明正(女)
- 明正(女) — 後水尾 — 後陽成 — 後奈良 — 正親町 — 誠仁
- 誠仁 — 後光嚴 — 後圓融 — 後小松 — 稱光
- 後光嚴 — 崇光 — 榮仁 — 貞成 — 後花園 — 後土御門 — 後柏原
- 後柏原 — 後奈良
- 後土御門 — 後村上 — 後龜山
- 後村上 — 長慶
- 後龜山 — 後宇多 — 後二條 — 後醍醐
- 後二條 — 花園
- 後醍醐 — 後村上
- 後宇多 — 伏見 — 後伏見 — 後深草
- 後伏見 — 光嚴
- 後深草 — 龜山
- 後伏見 — 光明
- 後伏見 — 後二條
- 後深草 — 伏見
- 後鳥羽 — 土御門 — 後嵯峨 — 後深草
- 後嵯峨 — 後鳥羽
- 後嵯峨 — 順德 — 仲恭
- 後鳥羽 — 後堀河 — 四條
- 後堀河 — 高倉 — 安德
- 高倉 — 後鳥羽
- 高倉 — 守貞 — 後堀河
- 後白河 — 高倉
- 後白河 — 近衛
- 鳥羽 — 後白河
- 鳥羽 — 後鳥羽
- 明治 — 今上
- 明治 — 光格 — 仁孝 — 孝明
- 光格 — 直仁 — 典仁
- 直仁 — 光格

第一　天照大神

天の岩屋
本圖は天の岩屋の前で神々樣が集つて神樂を行はせ給ふ所である。面白く舞ひ給ふは天鈿女命で、岩戸を開き給ふは手力男命である。其の他の神々樣は舞を見て笑ひ興じて居給ふ所である。

天孫降臨
瓊々杵尊が高天原から日向の高千穗の峯に降り給ふ所である。中央にはすのは尊で、先きに立つて道案内してゐるのは猿田彦大神である。

大蛇退治
素戔嗚尊が簸川の川上で八岐の大蛇を斬らうとし給ふ所である。坐して居るのは櫛名田姫で下に並んでゐるのは八つの酒槽である。

對照表

天皇御在位
將軍在職

一　鎌倉時代

文治元（一八五）
後鳥羽
土御門
順德
仲恭
後堀河
四條
後嵯峨
後深草
龜山
後宇多
伏見
後伏見
後深草
後醍醐
元弘三（一九九三）

源頼朝
頼家
實朝

藤原頼經
頼嗣
宗尊親王
惟康親王
久明親王
守邦親王

二　吉野時代

建武元（一九九四）
後醍醐
後村上
後龜山
元中九（二〇二）

三　室町時代

明德三（二〇二）
後小松
稱光
後花園
後土御門
後柏原
後奈良
正親町
永祿十（一二二七）

足利
義滿
義持
義量
義教
義勝
義政
義尚
義稙
義澄
義稙
義晴
義輝

四　安土桃山時代

永祿十（一二二七）
正親町
後陽成
慶長三（一六〇八）

義榮
義昭

五　江戸時代

慶長四（一六〇九）
後陽成
後水尾
明正
後光明
後西院
靈元
東山
中御門
櫻町
桃園
後櫻町

德川家康
後桃園
光格
仁孝
孝明
明治

秀忠
家光
家綱
吉宗
家重
家治
家齊
家慶
家定
家茂
慶喜

慶應三（一八六七）

家康
宣綱

第二 神武天皇

神武天皇長髓彦を討ち給ふ

神武天皇が鳥見山で長髓彦と戰ひ給ふ折柄一羽の金色の鵄が飛んで來て御弓のさきに止つたが其の光は電のやうで。賊軍はために目が眩み且懼れて悉く逃げ去つた。本圖はそこを表はしたのである

金鵄勲章

戰場に出て手柄のあつたものに與へる名譽の勲章で、功一級から功七級まである。神武天皇が長髓彦を討ち給うた時、金の鵄が御弓に止つて、皇軍が大勝利を得たことに基いて、明治二十三年に制定された勲章である。

橿原神宮

奈良縣高市郡畝傍山の南麓に位し、昔の宮の趾である

第三 日本武尊

日本武尊

景行天皇の御子で聰明で且勇武なお方であつた。熊襲が叛いた時いつて之を征伐し蝦夷が反した時またいつて之を征服し給うた。歸路膽吹山の賊を討たうとして山中で病に罹り遂に伊勢の能褒野で薨じ給うた。御年三十。天皇は痛く悲み給うた。

熱田神宮

愛知縣名古屋市にある、官幣大社で日本武尊等を祀る

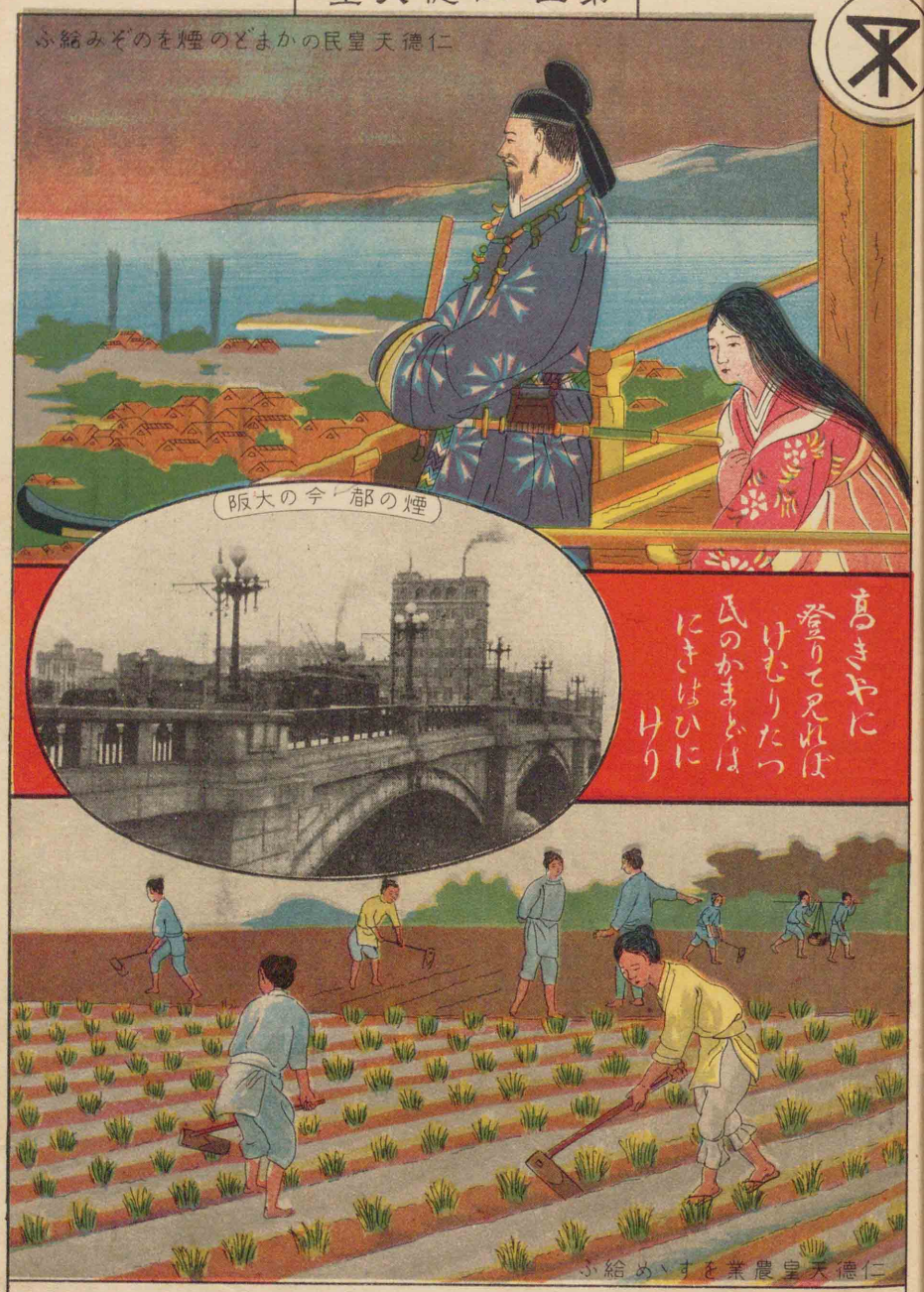
熊襲と蝦夷

地圖の下部のは熊襲で最上のは蝦夷の肖像である。

梟師殺さる

日本武尊は九州に至り給ひ單身川上梟師の邸に入り醉臥するをうかがつて刺し給うた。時に御年十六の少年であらせられた。

第五 仁德天皇



仁德天皇

仁德天皇は仁慈の御心深く、また產業を奬勵して、常に民の幸福を圖り給うた。上圖は天皇が再び高臺にのぼり、炊煙の盛に立ちのぼるを見て「朕すでに富めり」とおつしやつて深く喜んでゐます所である下圖は農民共が池溝を開き耕作に勵んでゐる所である。

今の大阪

大阪は仁德天皇が都し給ひし頃は、誠に寂しくあつたが、今の人口は約二百有餘萬で商工業は盛で、大小の工場が多く煙突の煙は常に空をおほうて天日も爲に見ねぬといふ位である。

記號

本圖の右上部にある記號は今の大阪市のマークである

第四 神功皇后

神功皇后

仲哀天皇の皇后で頗る御聰明なお方であつた。熊襲が叛いた時親ら軍勢を督して三韓を征伐し給うた。凱旋遊ばしてから應神天皇をたすけて政をとり給ふこと六十九年御年百で崩じ給うた。

新羅王の降服

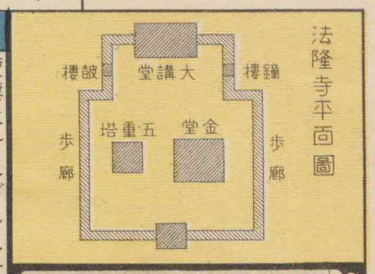
神功皇后新羅を攻め給ふや、新羅王大に懼れて、直に白旗をあげて降服した。本圖は新羅王が皇后の御前で永久の服從を誓ひ寶物を献上して居る所である。傍らの老人は武內宿禰である。

武內宿禰

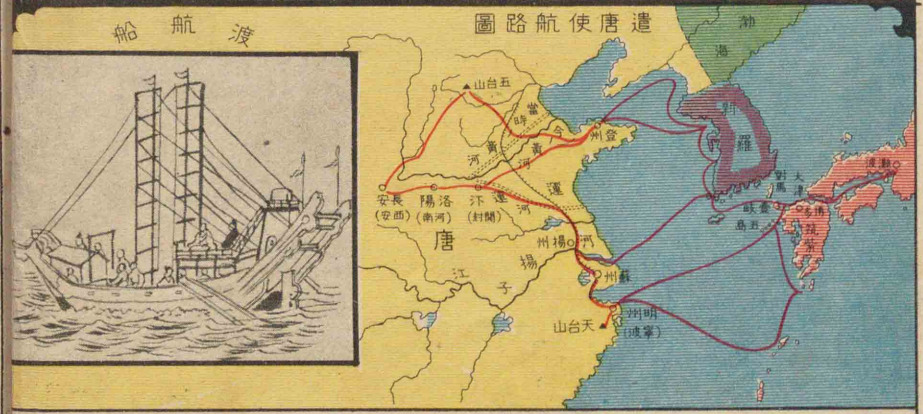
武內宿禰は景行成務・仲哀・應仁・仁德天皇の五朝に仕へた大忠臣で官にあると二百四十四年間だつたといふ

第六　聖德太子

聖德太子及び二王子御影



法隆寺



聖德太子　用明天皇の御子で厩戸皇子ともいふ頗る御聰明なお方で、深く佛教を好み、博く故典に通じて居られた。推古天皇の時皇太子となり、冠位を定め、憲法を制定し、國史を撰ぶ等御功績甚だ大であつた圖に於て中央のは聖德太子で、左右のは山背大兄王と殖栗王との二皇子である。

法隆寺　日本最古の寺院で千二百餘年前に聖德太子の建立されたものである。寺域は約二萬坪あつて美術上歷史上大に價値のある建築物である。殊に金堂、五重塔、中門等は尊重すべきものである。

渡航船　當時隋唐への渡航に用ひた船である

第七　天智天皇と藤原鎌足

談山神社

天智天皇　今の近江の大津に都を遷し、近江令を作り、學校を建て、新に戸籍を作る等御治蹟著しく實に中興の英主であつた。

藤原鎌足　天智天皇と共に蘇我氏を誅し、又大化の改革を成就する等輔弼の功甚だ大であつた。

入鹿誅せらる　本圖は大極殿に於て中大兄皇子と鎌足等が不忠の臣蘇我入鹿を誅し給ふ所である。御簾の前に驚き叫んでゐるのは入鹿で、槍をもつて向ひ給ふは中大兄皇子で劍を提げて駈來るのは佐伯子麿で弓に矢をつがへて窺つてゐるのは中臣鎌足である。

談山神社　奈良縣磯城郡多武峯村にあつて藤原鎌足を祀る。

第十　和氣清麻呂

和氣清麻呂

和氣清麻呂は性剛直な人で、僧道鏡が皇位をうばはうとした時身命をすて直言して皇位をまもり奉つた誠に無二の大忠臣であつた。姉の廣蟲も亦つゝしみ深く情深い方であつた。

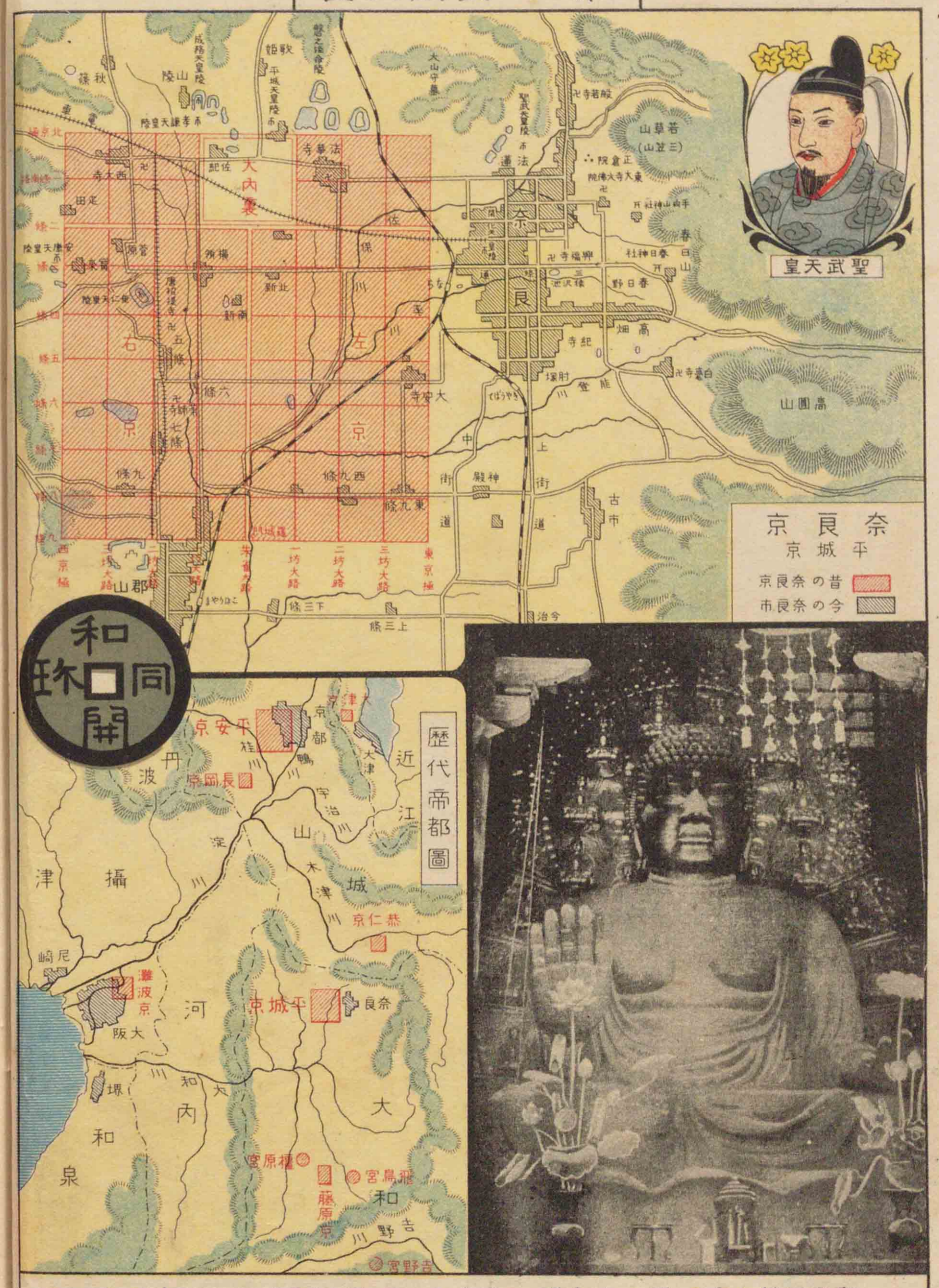
護王神社

京都市にある。誠忠の臣和氣清麻呂と其の姉廣蟲とを祀つてある。

行基菩薩

僧行基は聖武天皇の御代の高僧で、廣く世の中の公益をはかり最も上下の尊信があつた。行基は諸國を巡り其の過ぐる所道を開き、橋をかけ、池を掘り、堤をきづき、舟つきを定めるなどして世の利益を圖つた。

第九　聖武天皇



聖武天皇

聖武天皇は文武天皇の皇子である。天皇は深く佛教を信じさせ給ひ、また之を弘めて世の中を太平に導かうと思召し、勅して國毎に國分寺を造らせ、殊に奈良には東大寺を建て、大佛を鑄て之を安置し給うた。

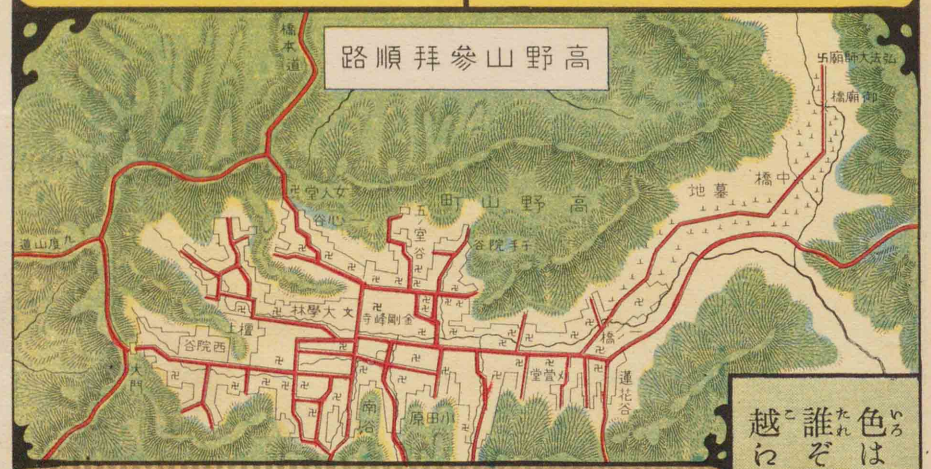
奈良の大佛

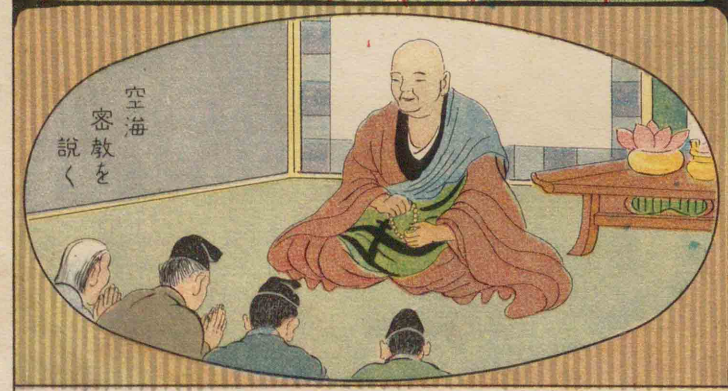
奈良の大佛は東大寺の大佛殿に安置してある。金と銅とで造つた坐像で身のたけ五丈三尺五寸、顏は縱一丈六尺横九尺五寸、掌の長さは五尺六寸、中指の長さは五尺ある。大佛殿は幾度か火災にかゝつたけれども、大佛の像は昔の儘である。但し頭と右手は後世に補ひつくつたものだといふ。

第十二　弘法大師

傳教大師

弘法大師



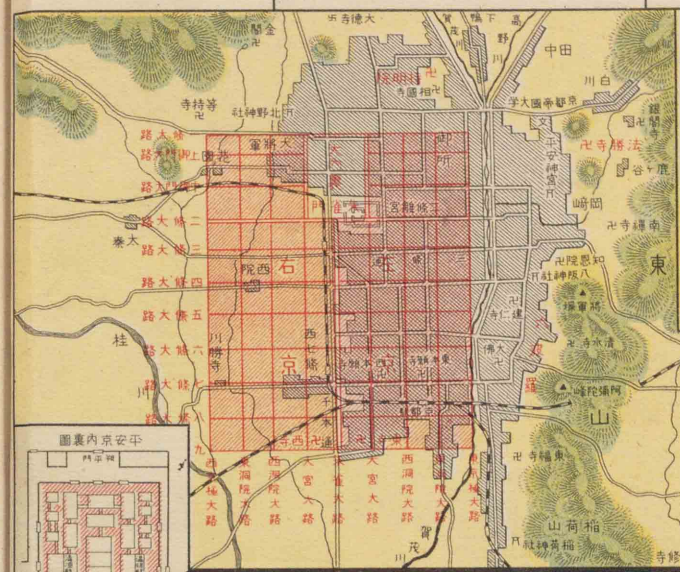


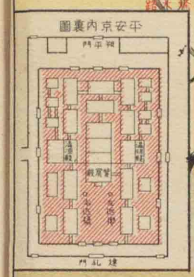
色は匂へど散りぬるを我が世
誰ぞ常ならむ有爲の奥山今日
越えて淺き夢みし醉ひもせず

弘法大師　弘法大師は讃岐の人で、桓武天皇の御代に唐に渡つて佛教を究め、三年の後かへつて國内に眞言宗を弘め、高野山を開き、金剛峯寺を建てられた。其の他の學校をたて、堤を築く等世の中の利益を圖る所多く上下の尊敬甚だ深き名僧であつた。金剛峯寺は和歌山縣伊都郡高野山にある。弘法大師が建てられた寺で眞言宗の總本山である。

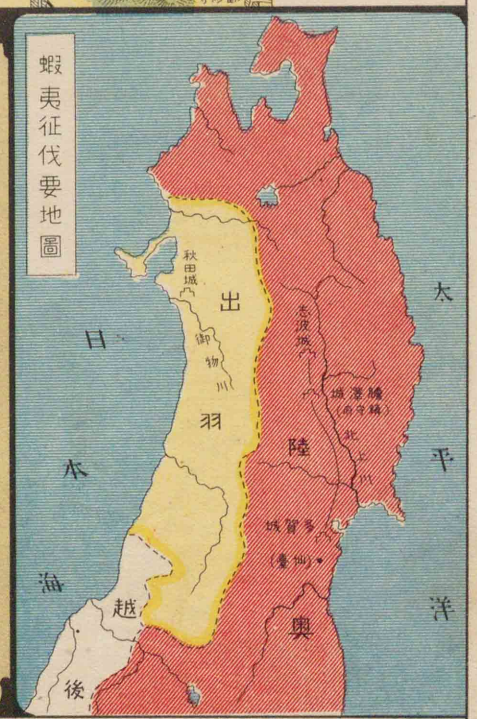
傳教大師　傳教大師は近江の人で、桓武天皇の御代に唐に渡つて佛教を研究し、歸つてから國内に天台宗を傳へられた弘法大師と共に高德の僧で、上下の尊敬甚だ厚かつた

第十一　桓武天皇と坂上田村麻呂





坂上田村麻呂



桓武天皇　桓武天皇は光仁天皇の御子で、中興の英主におはします。新に平安京を營み給うた事と蝦夷を平定し給うた事とは天皇の二大事業であつた。寶算七十で崩御。

坂上田村麻呂　坂上田村麻呂は桓武天皇に仕へ蝦夷を征伐して大功を立てた誠忠の臣であつた。身長五尺八寸體重三十五貫餘眼は隼の如く鋭く、ひげは針金の如くこはく、力飽までも強く、笑ふ時は子供もなづくといふ樣な温和と威嚴とを兼ね備へた偉丈夫であつた

大内裏と内裏　大内裏の中には内裏、大極殿及諸官省があり、めぐらすに瓦垣を以てし四方に十四門ある内裏は天皇のまします所で、紫宸殿、清涼殿などの諸殿がある。

第十三　菅原道眞

醍醐天皇

醍醐天皇は常に深く國政に御心を用ひさせまた甚だ仁慈の德に富ませ給うた。圖は或冬の寒き夜に御衣をぬいで、御躬ら貧民の苦を思ひやり給ふ所である。

菅原道眞

菅原道眞は學德の高い人で、朝廷に仕へるに及んで、天皇の御信任が頗る厚かつた。藤原時平深く之を嫉んで讒言した。爲に罪なくして筑前の大宰府に流された道眞は配所にあるも身を慎み、片時も天皇を忘れなかつた、圖は恩賜の御衣を捧げて、君恩の辱きを詩によつてのべて居るところである。

大宰府神社

福岡縣筑紫郡大宰府町にある。

第十四　藤原氏の專横

藤原氏略系（二）

- 忠平
  - 師輔
    - 兼家
      - 道長
        - 頼道（三代略）
          - 忠通
            - 基實（近衛家）
            - 兼實（九條家）
        - 教通
        - 彰子（一條）
        - 妍子（三條）
        - 威子（後一條）
        - 嬉子（後朱雀）
        - 頼長

朝臣の遊樂

藤原氏は菅原道眞をしりぞけてから益々勢を得て、高位高官はすべて一門で占めるに至つた。そして日夜遊樂にふけつて、天下の政をかへりみなかつた。圖は朝臣が管絃を合奏して遊び樂んで居る所である。

朝臣の遊船

本圖は藤原氏が花の朝月の夕に船を清流に浮べて音樂を奏して遊び樂んで居る所である。船は鷁首といつて鷁といふ水鳥の首を刻んで船の軸につけたのである。

もち月の歌

藤原道長が詠んだ歌で、己れの望みのすべてが叶つたことを十五夜の月に比べて得意の程を歌つたのである

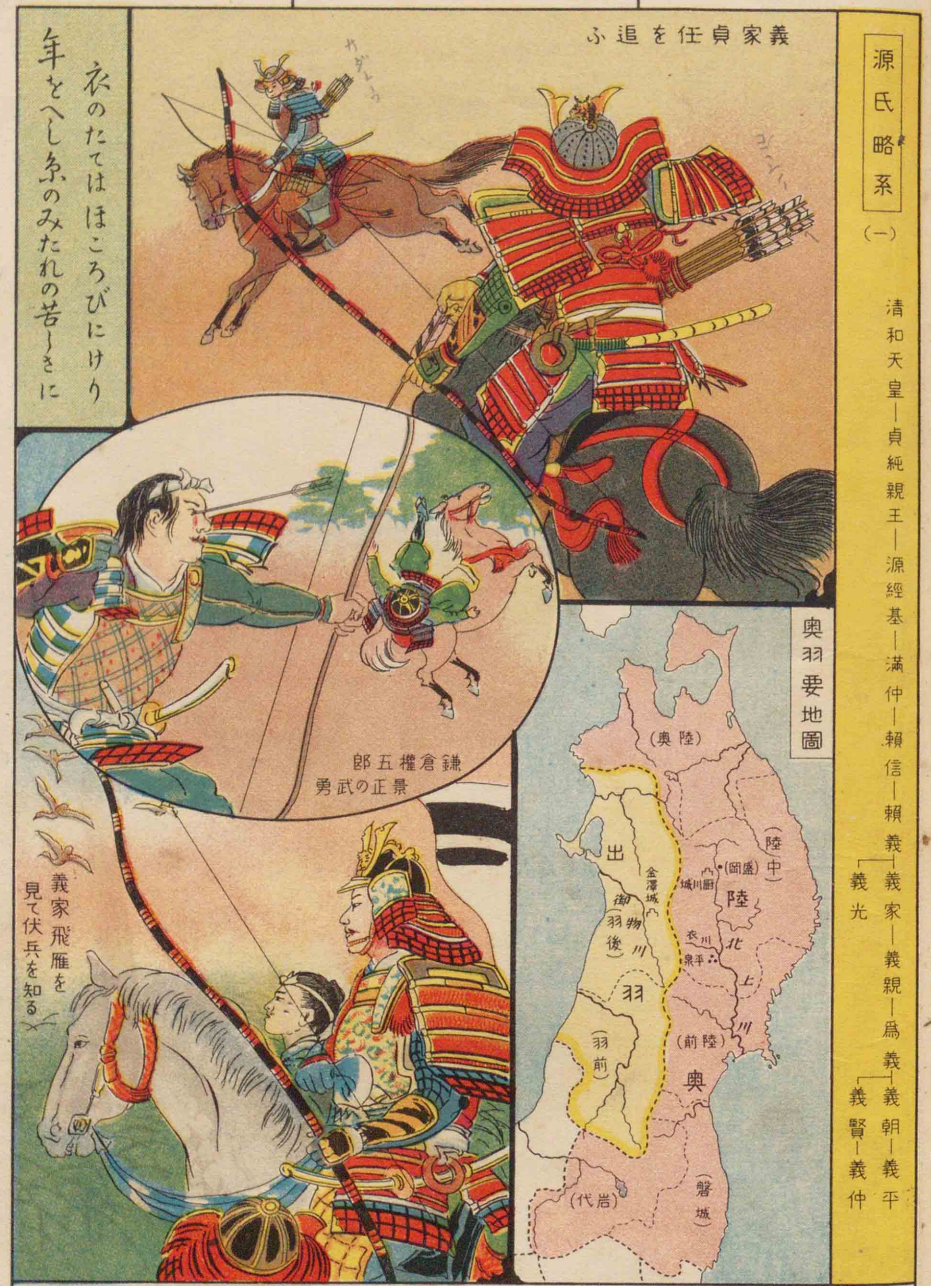
第十五　後三條天皇

後三條天皇　後三條天皇は英明な御方で、夙に藤原氏の我儘を抑へようと志し御躬ら政治をとり給うた。關白藤原頼通も天皇の御威光に恐れて宇治に隱居するに至つた。圖は天皇が大江匡房を師として學問を勵み給ふ所である。

南圓堂　本圖は藤原教通が再建せようがため特に請ふ所があつたけれども、天皇之を許し給はなかつたから、教通怒つて一族を率ゐて朝廷を退いたといふ南圓堂である。

石清水八幡宮行幸　後三條天皇石清水八幡宮行幸の時、御行列を拜觀してある者の車に金物などの打つてあつたのを悉く取り去らしめられた。

第十六　源義家



貞任を追ふ　本圖は源義家が衣川の館を攻めた時逃げて行く阿倍貞任を追駈けながら「衣のたては綻びにけり」と詠みかけた所が貞任はふりむいて、「年を經し絲の亂の苦しさに」と答へたので、義家は大に感心して貞任をのがしてやつた所である。

伏兵を知る　本圖は源義家が清原武衡を攻めに行く途中、雁の列が俄かに亂れだしたのを見て、大江匡房からの教を思ひ出し、野に伏兵のあることをさとつた所である。

景政の武勇　本圖は鎌倉權五郎景政が右眼に立つた矢を其の儘に追駈けて敵を射殺した所である。時に年僅かに十六。

第十七　平氏の勃興

保元の亂

本圖は保元元年七月十一日の夜に、源義朝が崇德上皇の據り給ふ白河殿に火を放つて急に攻立てて居る所である。風烈しくて火炎天をおほひ白河殿は遂に燒落ちたのである。

一矢て射沈

保元の亂に大立物であつた源爲朝は死を許されて伊豆の大島へ流された併し彼は活動の人で伊豆七島を征服して威張つて居た朝廷は二十餘艘の大船をもつて攻めたが彼は一矢で先頭の一艘を射沈めさうして自殺した

義平と重盛

待賢門の戰に惡源太義平が平重盛を追ひ左近の櫻右近の橘を七八回廻つたが遂に敵をにがした。

第十八　平重盛

常盤と三子

本圖は義朝の妻常磐御前が其の子今若丸、乙若丸をつれ、牛若丸を懷にして老母の命を助けようと思つて六波羅に申し出ようとするその途中の樣子である。

鹿谷の會見

平清盛の專横を惡み、上皇の御心を察した御近臣藤原成親は僧の西光や俊寛等と俊寛の鹿谷の山莊に會して密に平氏を滅さうと謀をめぐらして居る所である。

兄重盛と弟宗盛

弟宗盛「これほどの大事に當つて何故に武裝をなさらないのですか。」といへば、兄重盛は「大事とは何事か、朝敵は何處に居るか。」と問返して居る所。

宇治橋の戰

源頼政の軍と平家方知盛の率ゐる軍とが宇治橋を挾んで合戰して居る所である。

第十九 武家政治起る(一)

源頼朝

源義朝の第三子である。治承四年伊豆に起りついで鎌倉に入りこゝを根據地として平氏を亡し遂に此處に幕府を開いて武家政治の起源をつくつた人である。

平軍と水鳥

本圖は源平の兩軍が富士川を挾んで對陣してゐた時平軍が水鳥の羽音をきいて源軍の來襲と思ひ大に狼狽して逃散る所である

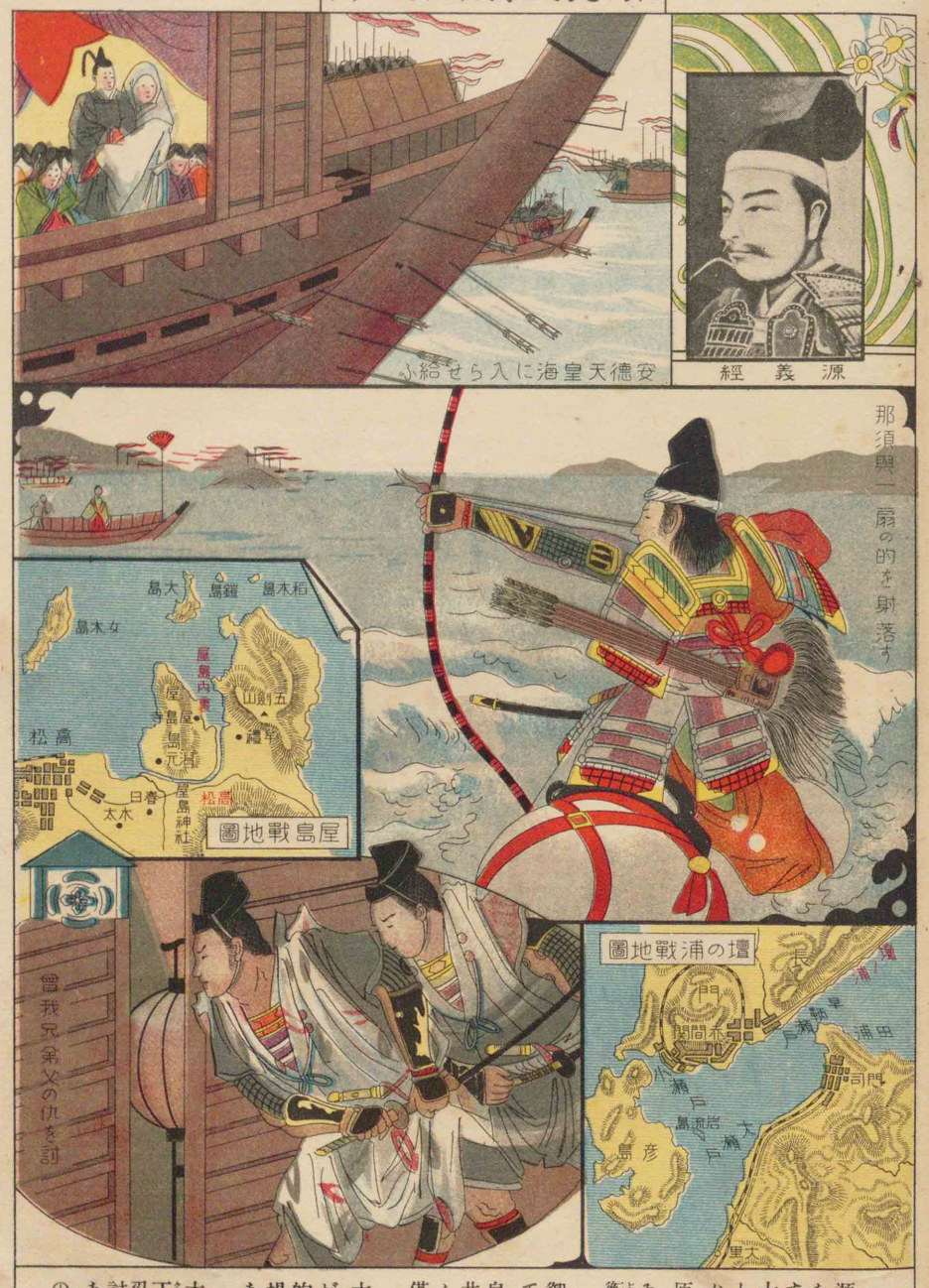
先陣の爭ひ

本圖は佐々木高綱と梶原景季とが各名馬に跨つて宇治川の先陣を爭つてゐる所である。

鵯越の逆落し

本圖は源義經が鵯越の嶮しき崖を駈けおりて福原城の背後に出ようとする所である。

第十九 武家政治起る(二)



源義經

源義朝の第九子である。兄頼朝をたすけて平氏を亡し大功を立てた。併し頼朝と不和を生じ奥州に逃れて藤原秀衡にたよつてゐたが後その子泰衡に殺された。

安德天皇

御船の中に抱かれてゐますは安德天皇で、今二位尼と共に海にいらせ給ふ所である。御年僅かに八歳。

那須與一

本圖は今那須與一が狙を定めて扇の的を射る所である場所は屋島の海である。

曾我兄弟

本圖は曾我兄弟が工藤祐經の陣屋に忍び入り父の仇を討たうとする所である。場所は富士の裾野である。

第二十一　北條時宗

北條時宗

北條時頼の子で、生れつき豪氣な人であつた。元の國が我が國に服從を強ひたとき、時宗は斷乎として從はず國民と一致協力して元の大軍を全滅させて國家を危きから救うた大功のおる人である。

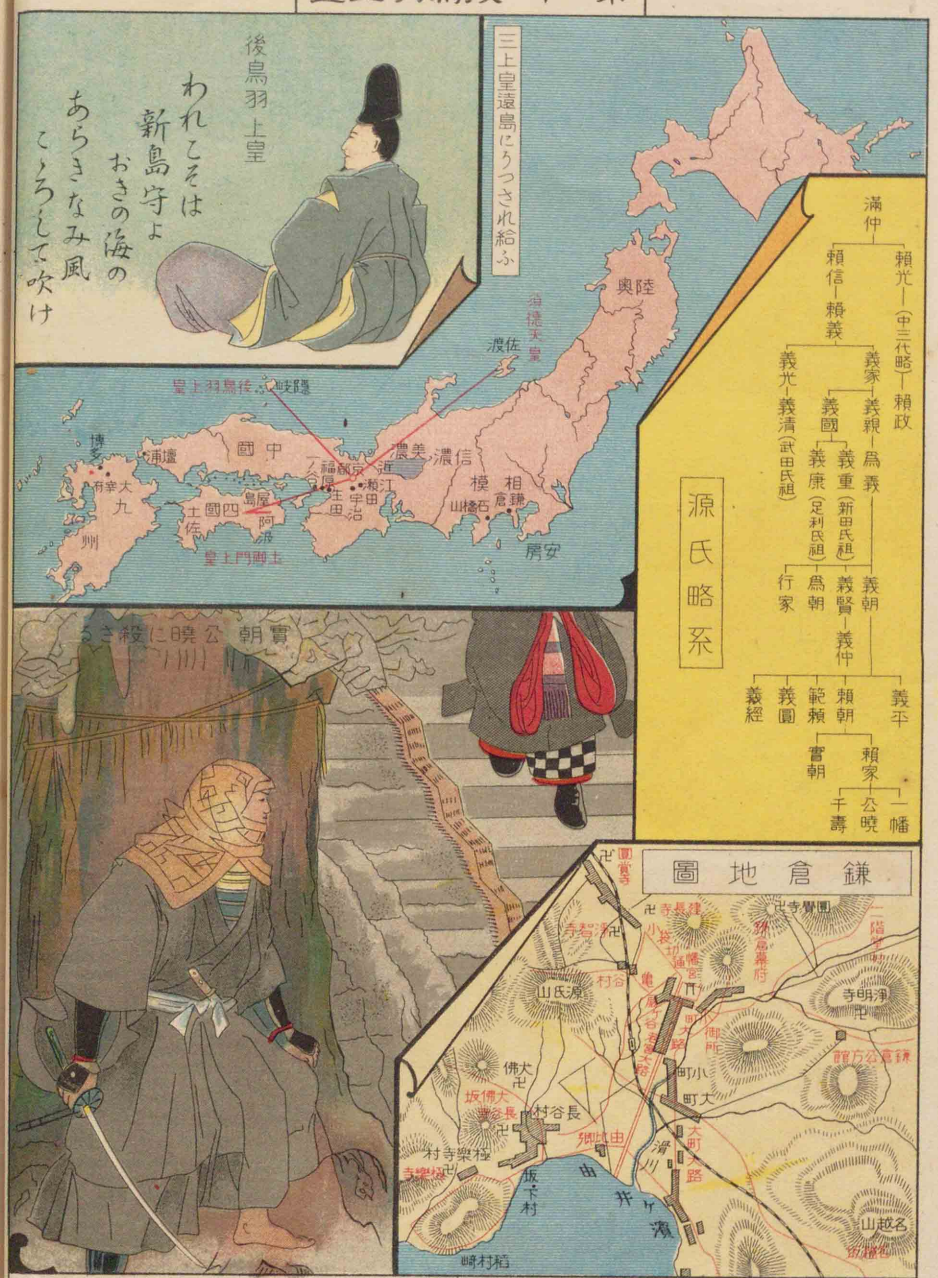
クビライ

元の國王で歐亞の二洲にわたつて廣大な領地を有し、四隣を威壓した國王である。唯從はない國は我が日本と印度アラビヤ位であつたといふ。

元寇

元は宋を滅した勢を以て弘安四年五月再び攻めて來た時に我が將士は一致して之を防ぎ戰つた爲めに元軍は上陸する能はず、その中に暴風雨の爲め元の船は全部覆り賊兵も多く溺死した。

第二十　後鳥羽上皇



後鳥羽上皇

承久の變に北條義時がおそれおほくも後鳥羽上皇を隱岐の島に遷し奉つた。上皇は憂き年月を此の寂しい孤島で送り給ひ、遂にこゝで崩れさせ給うたのである。圖にかいてある御製は上皇がしほ風の烈しく吹く時假の御所で御詠みになつたものである

源實朝

建久七年正月源實朝が右大臣拜賀の式を鶴岡八幡宮で行ひ、終つてから石段をおりて來た時頼家の子公曉が木蔭からをどりでて實朝を刺し殺したのである。蓋しこれは北條氏がそのかしたのによると言ふ。公曉は後にまた北條氏の爲に殺された。

第二十二　後醍醐天皇

錦旗を奪還す

護良親王が吉野山に入らうとし給うた途中、錦旗を賊の爲に奪はれたが村上義光後れて來て之を見るや奮然とをどりかゝつて敵の手から奪ひ還したのである。

笠置落ち

本圖は後醍醐天皇が笠置の山を落ちさせ給ふ途中、痛く疲れてしばし木蔭に憩ひ給ふ所である。「天下に隱家もなし」と歎き給ひしは實に此時である。

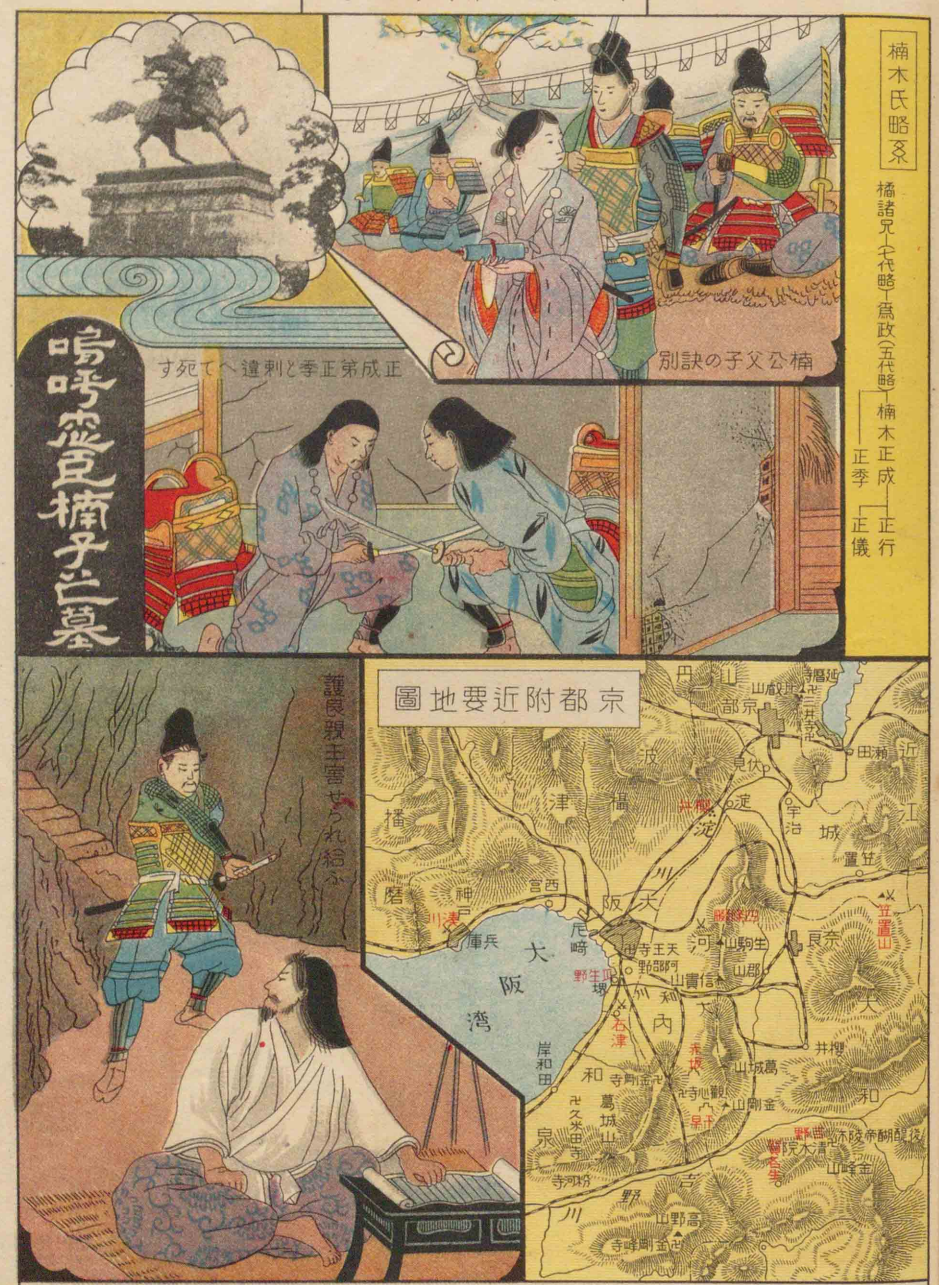
島をいで給ふ

本圖は後醍醐天皇が夜潛かに柴舟に御して隱岐の島を出でさせ給ふ所である。

勤王の魁

本圖は楠木正成が千早城に據り奇計をもつて賊を苦しめて居る所である

第二十三　楠木正成



父子の訣別

本圖は櫻井驛に於ける楠公父子の訣別で前面に立つてゐる少年は正行で今父から賜つた形見の劍を手にして無限の悲みの裏に別れるのである。

正成と弟正季

本圖は楠木正成が港川に於て不忠の臣足利氏と戰つたけれども寡は衆に敵せず遂に民家に入つて弟正季と互に刺違つて死をとげる所である。

護良親王

不忠の臣足利尊氏は護良親王を讒して鎌倉の土牢に幽し奉つた。これだけでもゆるすべからざる足利氏の大罪であるのに弟直義が急に西上せんとした時其の臣をして弑させたのである。

第二十五　北畠親房と楠木正行

北畠親房
神皇正統記編纂の圖

吉野朝時代
形勢地圖
官軍
足利方

楠木正行

四條畷神社

瓜生野の合戰

北畠親房
本圖は南朝の忠臣北畠親房が常陸の關城にあつて日夜賊をうつ謀を考へつゝ其の間に、神皇正統記を著して大義名分を明かにせんとしてゐる所である。

瓜生野の合戰
正平二年十一月楠木正行賊將山名時氏と瓜生野に戰つた。六千の賊兵は僅二千の官軍に攻立てられ、總崩れとなり爭つて逃出した。時に橋を踏みはづし川に落ちたもの五百人、正行は之を見、士卒に命じて引き上げさせた上、親切にいたはつて歸した。

四條畷神社
大阪府北河內郡甲可村にある南朝の忠臣楠木正行を祭つた別格官幣社である。

第二十四　新田義貞

義貞太刀を海に投じて祈る

新田義貞

藤島神社

義貞藤島に戰死す

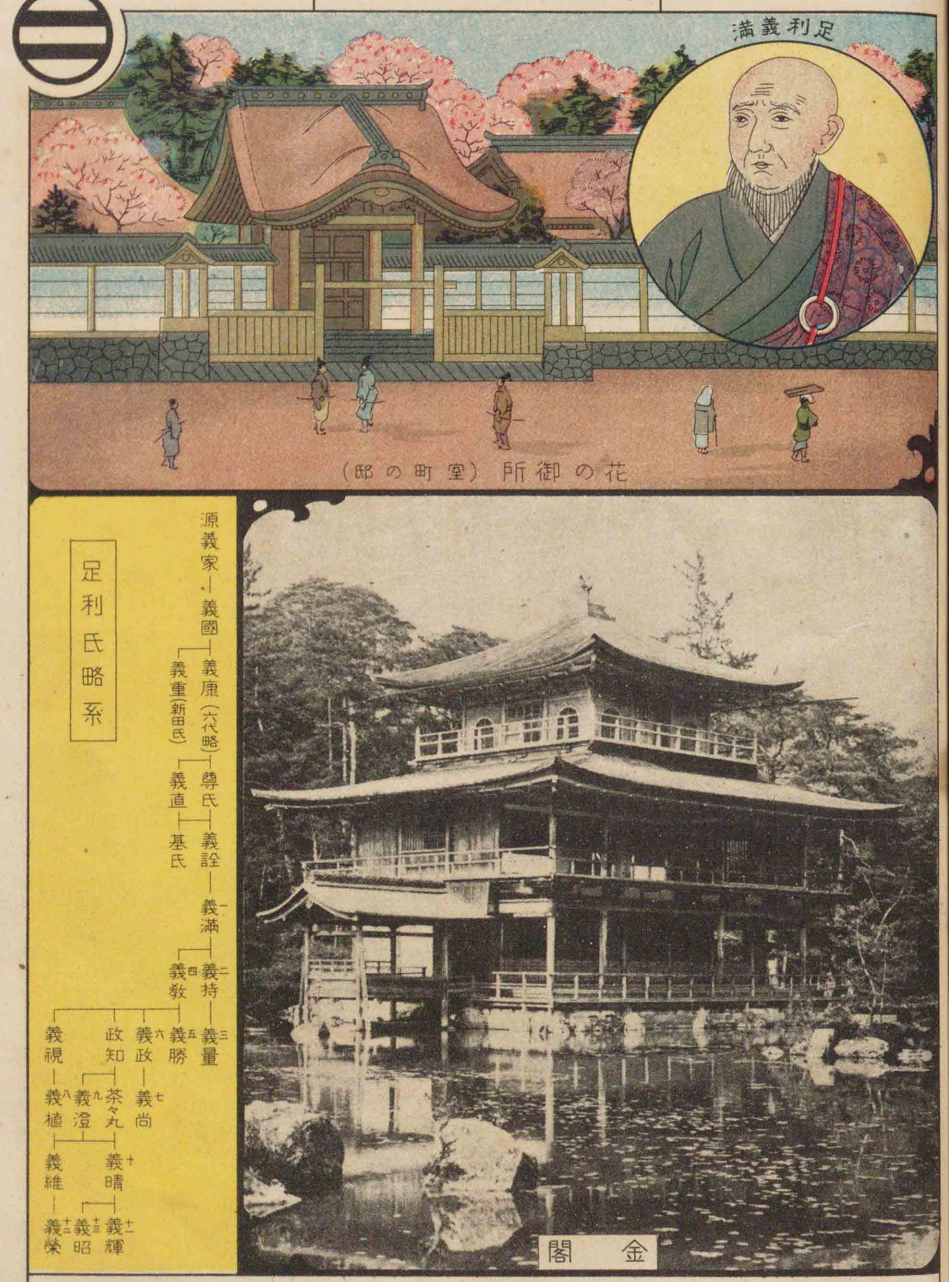
新田氏略系
源義家―義國―新田義重―（五代略）―朝氏―義貞―義顯
義興
義宗

太刀を投ず
本圖は新田義貞が義兵をあげて鎌倉を攻める時稻村が崎で黃金作の太刀を海中に投じ海水が沖合遠く退いて軍勢の通る道を開け給へと海神にお祈りをして居る所である。

義貞の戰死
新田義貞が藤島の戰に、賊の勢が強くて官軍の危きを聞き僅かに五十騎を率ゐて急ぎ赴く途中、敵兵三百騎と野に出遇ひ、大に奮戰したけれども、愛馬は倒れ一矢飛來つて義貞の額に中つた、遂に三十八歳を一期として忠死したのである。

藤島神社
福井縣福井市足羽山の東南にある。南朝の忠臣新田義貞が祭神である。

第二十七　足利氏の僭上



足利氏略系

源義家―義國―義康（六代略）―尊氏―義詮―義滿―義持―義量
義國―義重（新田氏）
義康―義直―基氏
尊氏―義詮―義滿―義教―義勝
義教―義政―義尚
義教―義政―政知―茶々丸
義教―義政―政知―義澄―義晴―義輝
義晴―義澄―義昭
義教―義政―政知―義視―義植―義稙―義榮

足利義滿
京都室町幕府を開いて足利氏の基礎を固くし後亀山天皇の還幸を請うて政治の統一を圖るなど功績をあげた人であつたけれども北山に別荘を造つて驕奢を極め明主に書を送るに日本國王の名を以てしまた曾て比叡山に登つた時上皇の御幸の御儀式に擬したなど僭上の行爲が多くあつた。

花の御所
京都室町にあつて足利義滿の邸宅である。庭内に珍草奇木を植ゑて最も善美を盡した故に世人は之を花の御所と呼んだ。

金閣寺
京都北山にあつて足利義滿の造營である。

第二十六　菊池武光

菊池氏略系

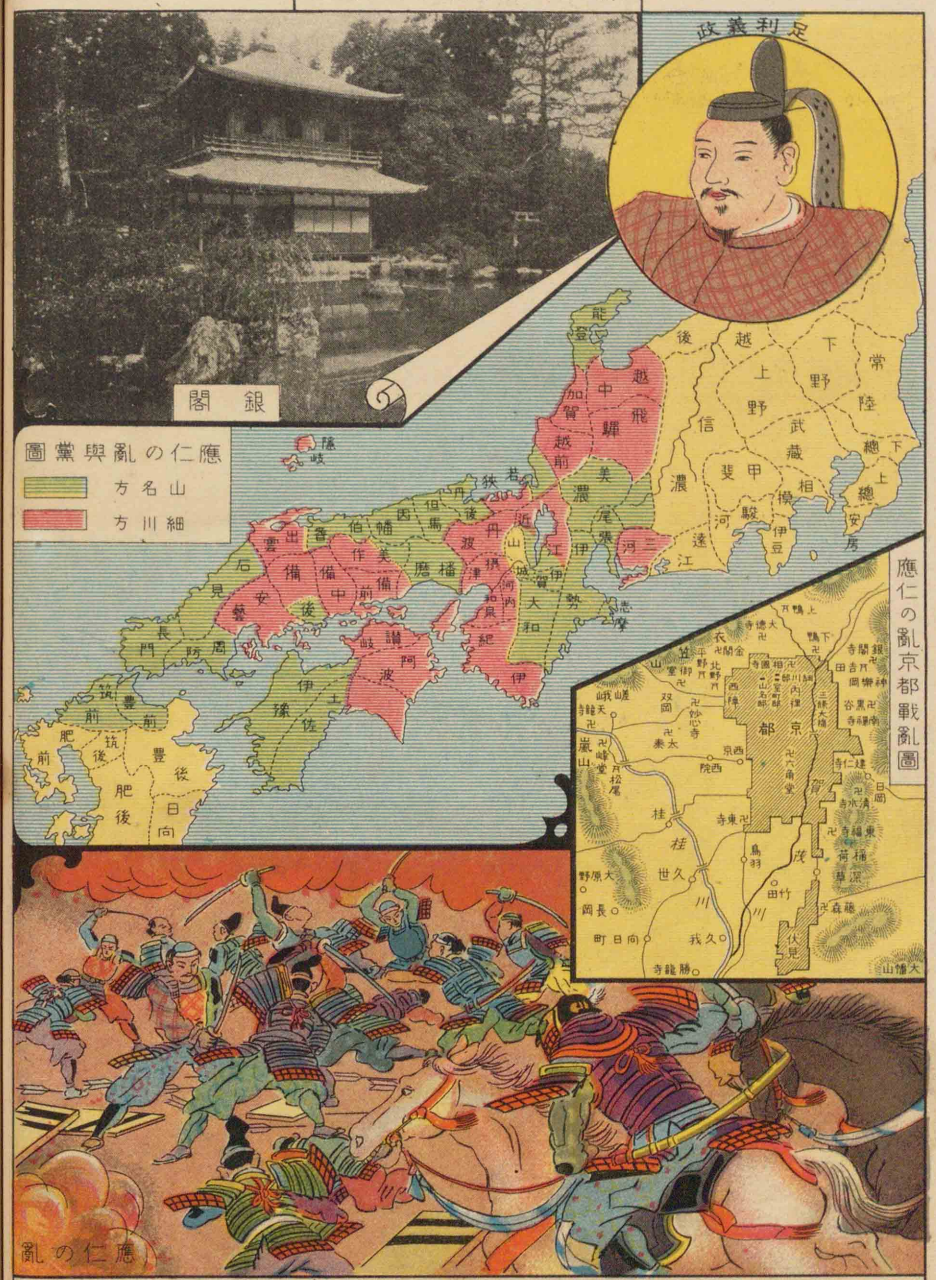
藤原忠平―武房―時隆―武時―武敏―武光
武時―武重

菊池神社
熊本縣菊池郡隈府町の舊城址内にある。別格官幣社で南朝の忠臣菊池武時以下一族四名を合祀してある。

武光頼尚を破る
本圖に於て向ふの方に陣せるは賊將少貳頼尚の軍勢で手前の方のは菊池武光の軍勢である。武光は兵を分つて敵を前後から襲ひ自ら兵を率ゐて夜明方に敵の中堅をつかうとしてゐる。圖に於て馬に跨つて軍を指圖してゐるのは即ち大將武光である。

武時神前に死を誓ふ
武時獨り九州に勤王の兵を起し、神前に死を誓ひ、北條英時、少貳貞經等の敵將と勇しく戰ひ終に討死した。

第二十八　足利氏の衰微



足利義政

足利六代將軍である。意を政治に用ひず日夜遊樂に耽り之がため天下大に亂れた。殊に晩年盛に工事を起し重稅をとりたてた爲め萬民は非常に苦んだ。彼の銀閣寺はかかる金で造つたものである。

銀閣寺

京都市東山の慈照院の中にあつて、足利義政が建てたのである。二層樓で金閣寺にならつて造つたのである義政死するとき遺命して寺とした。

應仁の亂

本圖は應仁の亂の光景を畫いたのである。山名・細川氏兩黨の二十餘萬の大兵が京都の市中に混戰し市をして全く灰に歸せしめる所である。

第二十九　北條氏康

北條氏康

北條氏綱の子で沈着且つ深謀のある人であつた。兩上杉氏をほろぼして益〻領地を擴めまたよく領內を治めて民心を集め威を關東に振うた。

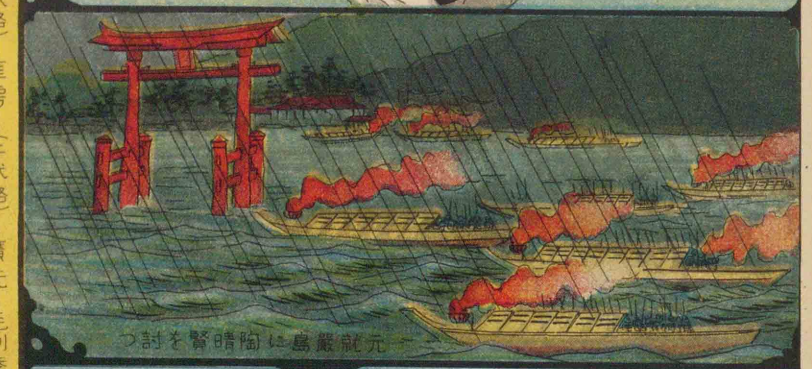
河越の夜襲

時に北條方の部將北條綱成上杉勢の爲に河越城に圍まれた。氏康は之を救はんと手兵八千を率ゐて迫つた。上杉方の勢强く容易に當り難い。そこで策をめぐらし僞つて和睦を申込み、其の油斷に乘じて夜半俄に敵を襲ひ、大に破つた。

早雲小田原城を奪ふ

本圖は北條早雲が狩獵に托し急に兵を起して小田原城を攻め城主大森を逐はうとする所である。

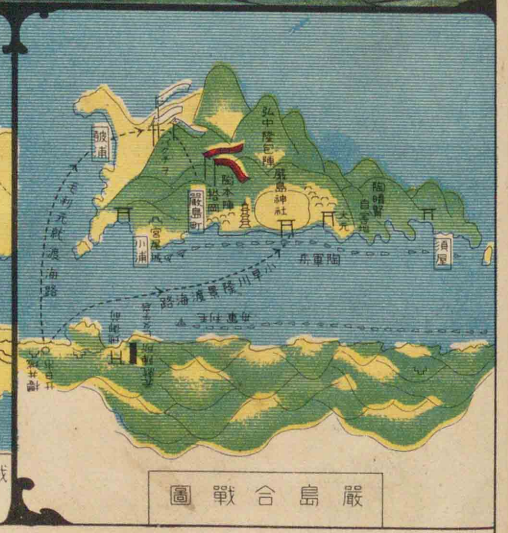
第三十一　毛利元就



毛利氏略系圖

平城天皇―大江音人―(六代略)―匡房―(三代略)―廣元―毛利李光―(九代略)―
弘元―元就―隆元―輝元―秀就
元春―(吉川)―元長―廣家
隆景―(小早川)―秀秋

戰國時代形勢圖（西方面）



嚴島合戰圖

毛利元就

毛利氏は大江匡房の子孫で、代々安藝に居た。元就は幼時から大志を抱き始は大内氏に服してゐた。陶晴賢を亡して後は大内氏に代り、尼子氏を攻めて降し、廣大な地を領して威を中國に振うて居た。

三子を誡む

本圖は元就が其の子隆元・吉川元春・小早川隆景を膝下近く呼んで、兄弟三人が互に協力して毛利家を守つて行くやう誡めてゐる所である。之がため元就の死後も少しも衰へず依然勢力があつたのである。

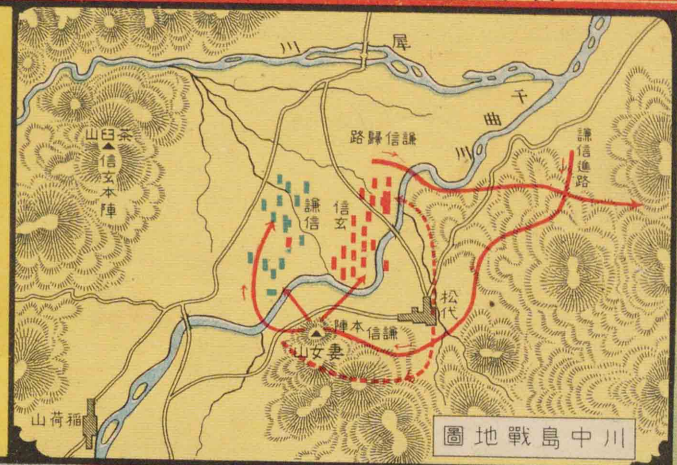
陶晴賢を討つ

本圖は毛利元就の軍が雨風の烈しい夜に乘じて陶晴賢を嚴島に襲ふ所である。

第三十　上杉謙信と武田信玄

上杉氏略系

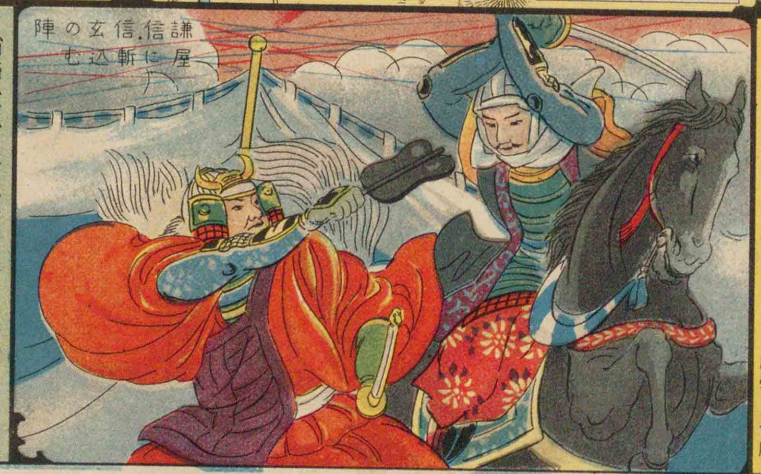
藤原清房―(四代略)―上杉顯定―(四代略)―憲勝(憲政)―
長尾爲景―景虎(上杉輝虎)―謙信



川中島戰地圖

鞭聲肅々夜渡河　曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍　流星光底逸長蛇

霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更
越山并得能州景　遮莫家鄕懷遠征



武田氏略系

源義光―義清―清光―信義―(十四代略)―
晴信(信玄)―義信
勝頼―信勝

上杉謙信

長尾爲景の第二子で代々越後に居つた。生れつき大膽で且勇氣に富んでゐた。北條氏と戰ひ、又武田信玄と屢〻川中島で戰つた兵を率ゐて京都に向はんとしたが俄かに病死した。

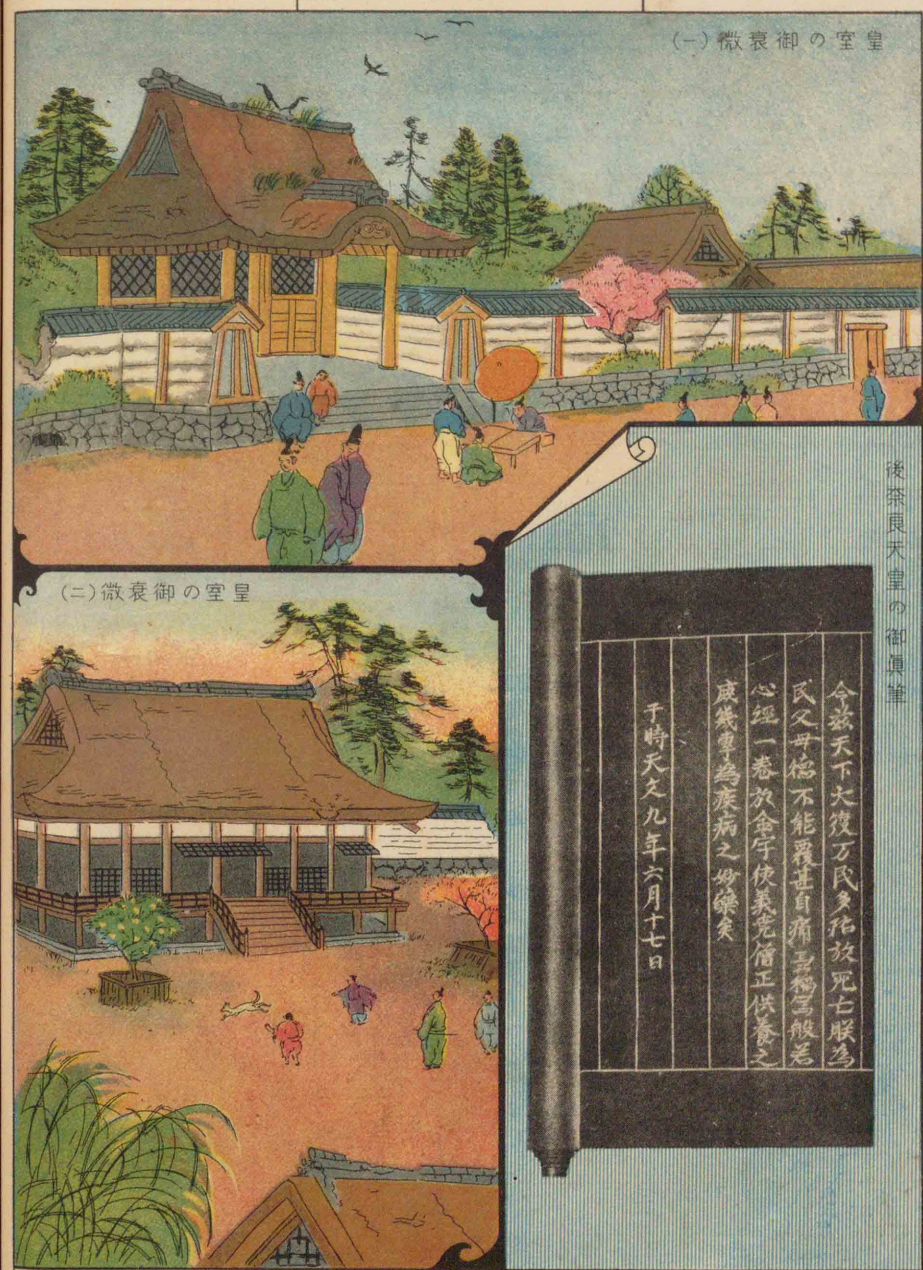
武田信玄

武田信虎の長子で代々甲斐に居つた知謀に長け謙信と屢〻川中島に戰つたが勝負が決しなかつた。近國を取り駿遠を合せ三河に入らうとして病にかゝり歸る途中遂に死んだ。

信玄に切込む

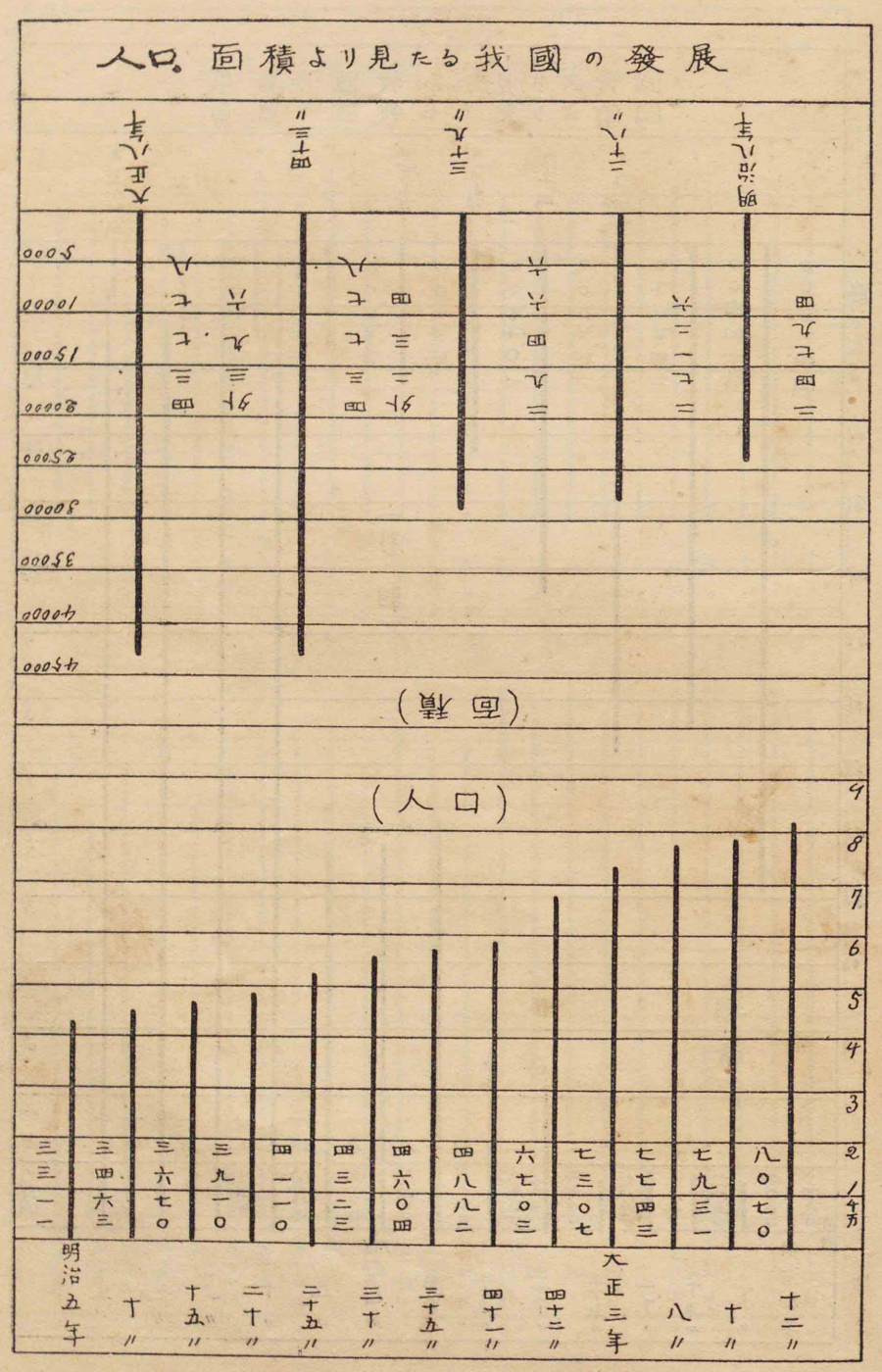
本圖は上杉謙信が不意に武田信玄を襲ひ太刀を振つて切付け信玄は軍配團扇を以て之を防ぎ、漸く危難を免れる所である。

第三十二　後奈良天皇

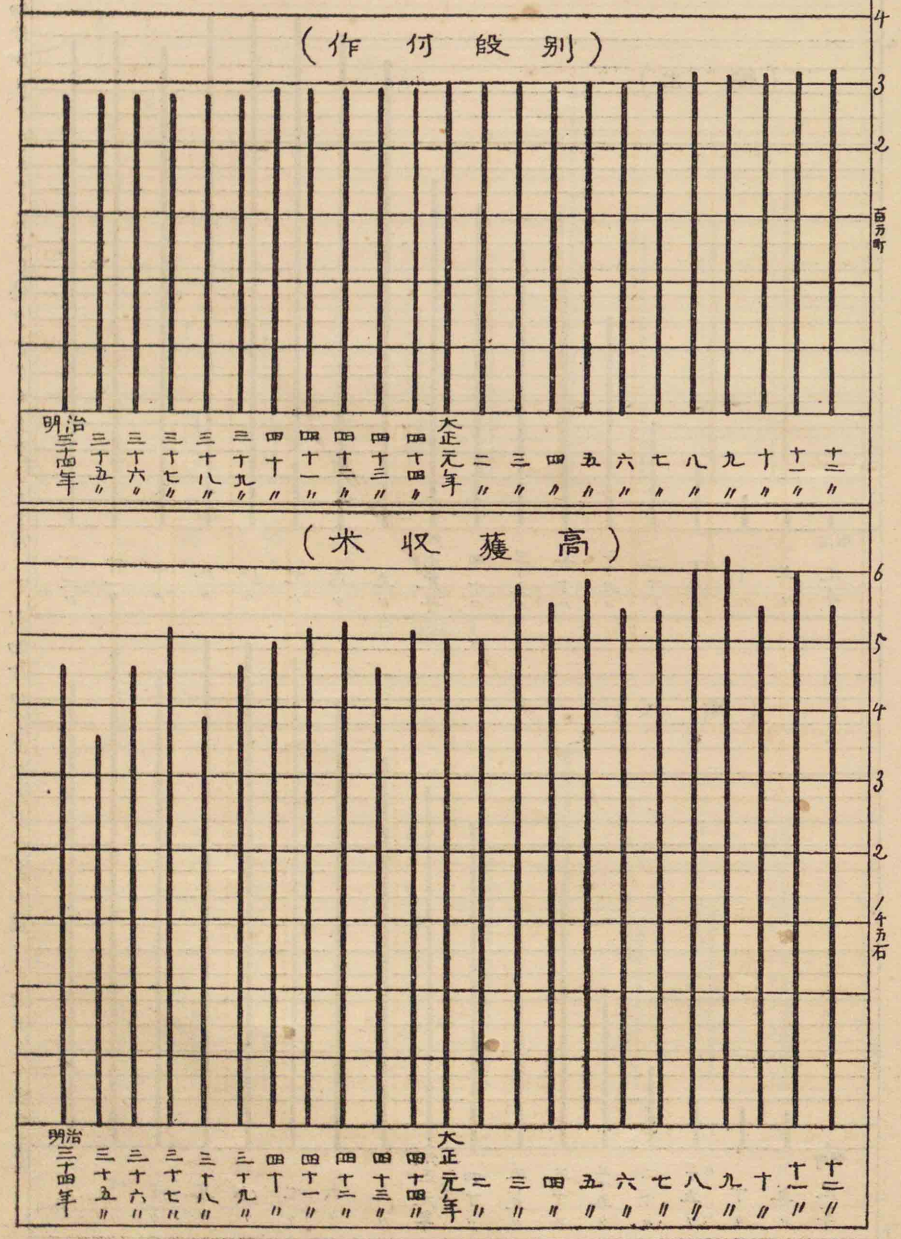


皇室の御衰微　後奈良天皇の御代には朝廷の御衰微が其の極に達し上圖のやうに御所の築地は破れてもこれを繕ふことができないで竹垣に茨を結びつけた所もあつた。また下圖（二）のやうに無心の子供等が禁中に入つて殿上にて土を弄び甚しきに至つては右近の橘や左近の櫻の下で露店をひらく者もあつたといふ。殿内もいたくすたれて賢所の御あかしの光は遠く漏れて、三條の橋の上から望むとが出來たといふいかに世の中が亂れてゐたとてあまりにおそれおほいことではないか。かやうな時代に於ても皇室は尊崇の中心となつて威光をかがやかして居たのである。

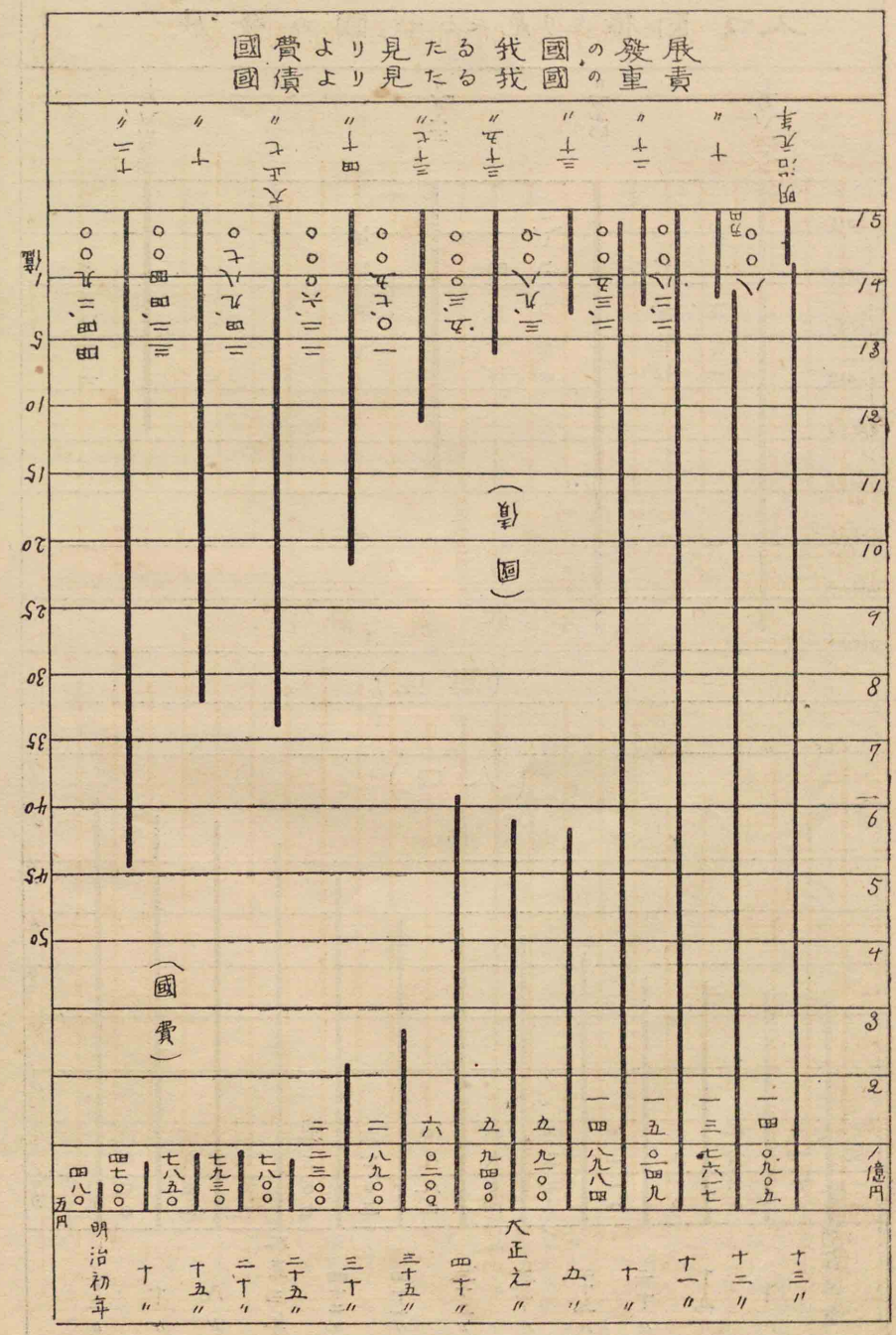
展發の國我るた見りよ積面。口人



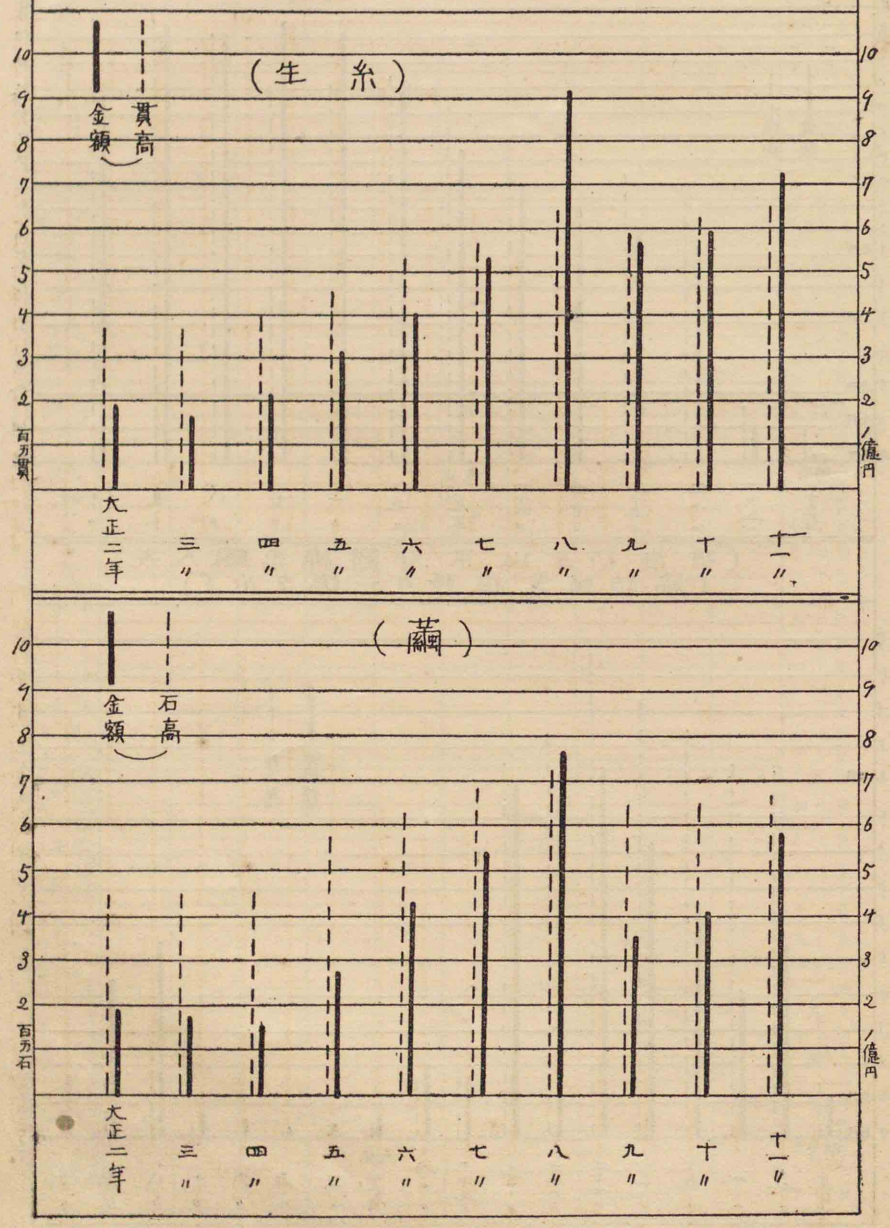
米産額の作付段別より見たる我國の發展



國費より見たる我國の發展
國債より見たる我國の重責

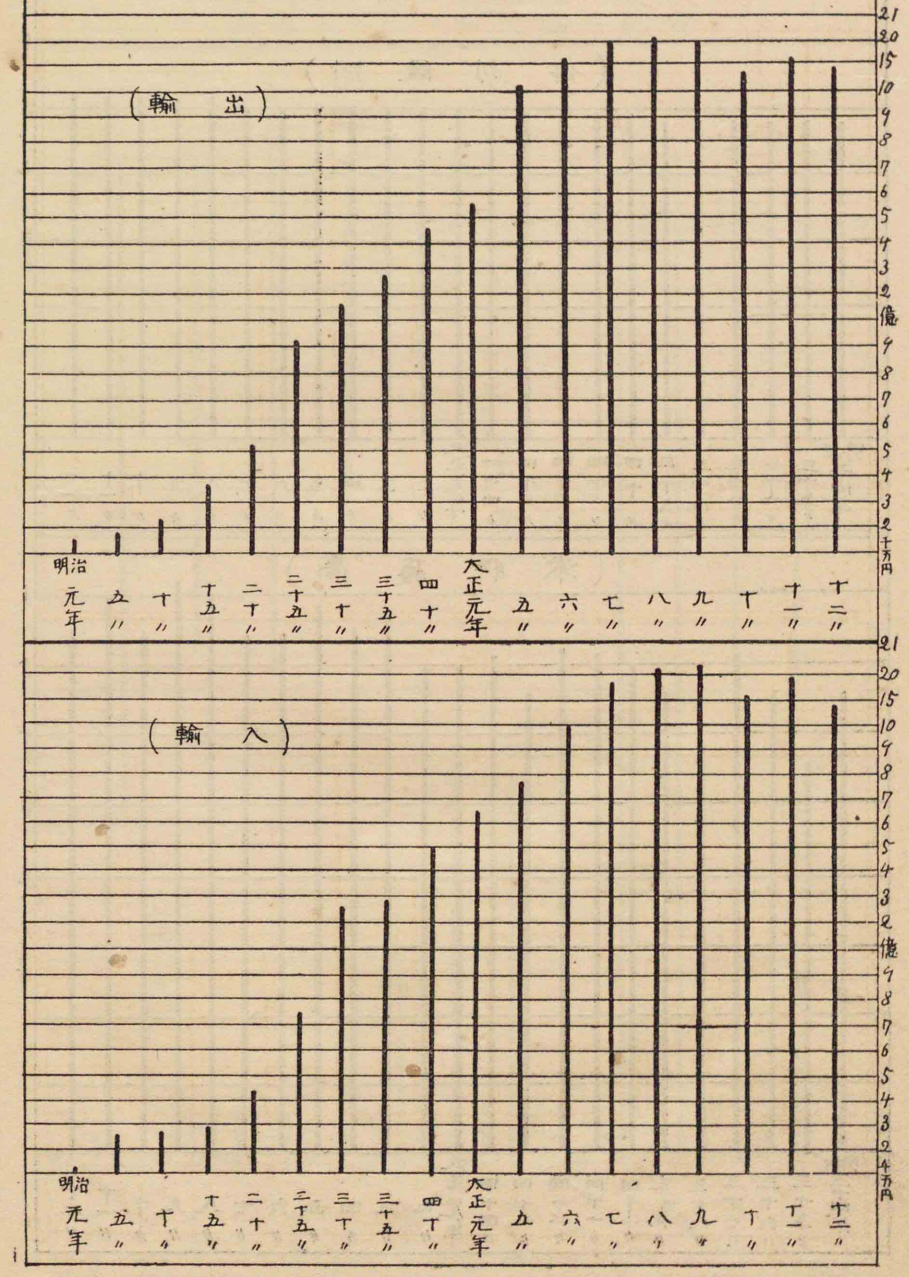


繭及び生糸より見たる我國の發展

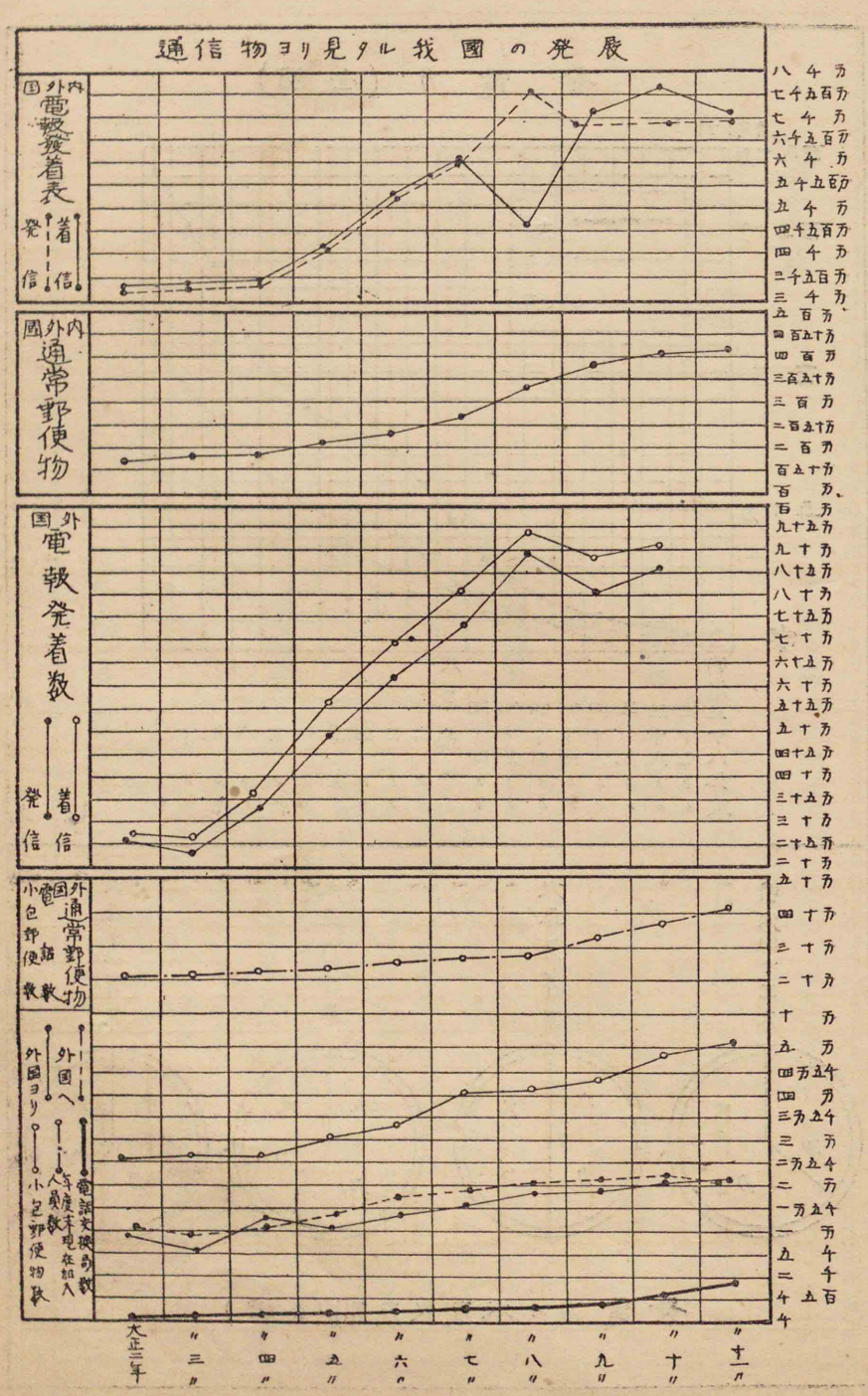


海外貿易より見たる我國の發展

輸出入物品總價額

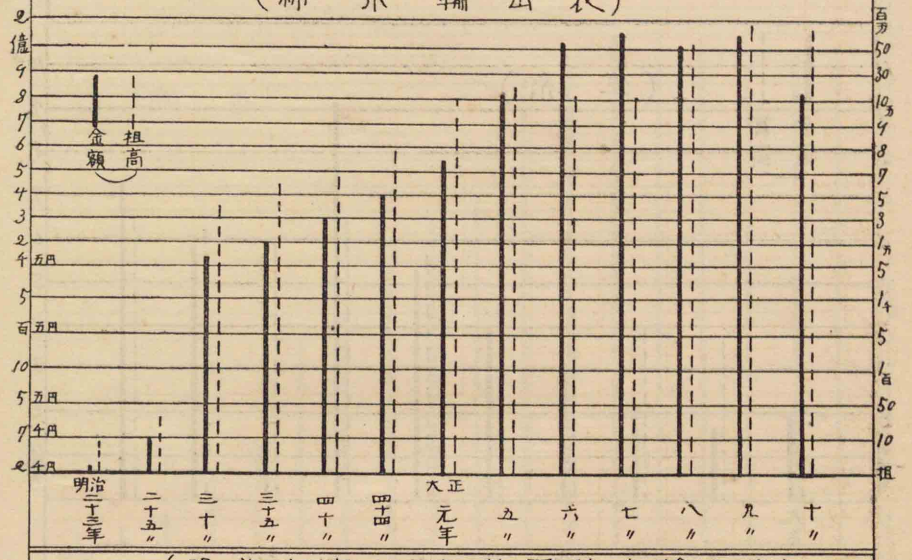


通信物ヨリ見タル我國の発展

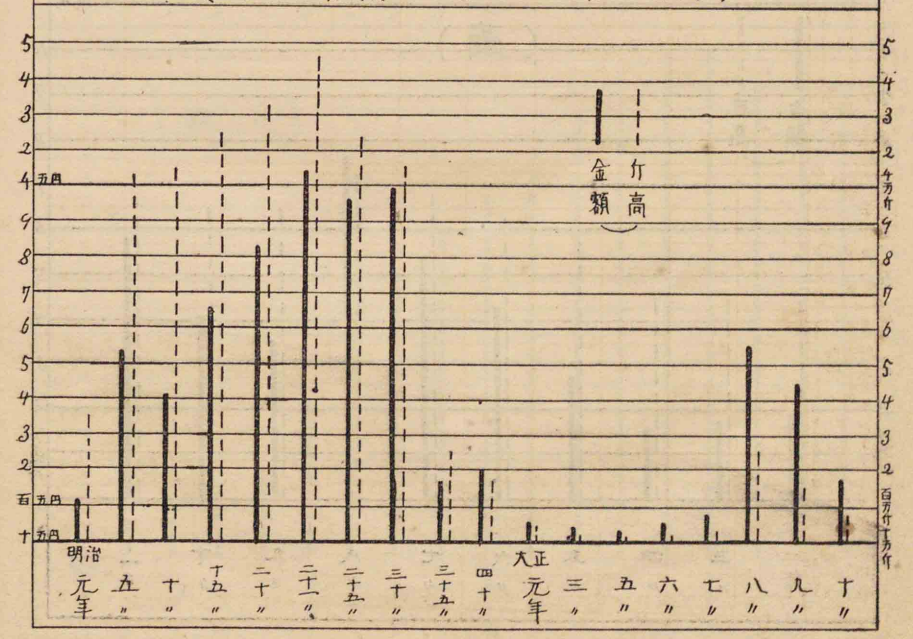


綿糸事業より見たる我國の發展

(綿糸輸出表)



(明治初年以来外國綿糸輸入表)
(綿紡績業推移の一端を示す)



自習問題

(一)天照大神の高大な御德につき語れ。(二)天叢雲劔の由來につき語れ。(三)天孫の御降臨につき言へ。(四)天祖が皇孫に告げ給ひし神勅を書け。(五)萬世に動きなきわが國體の基はどうして成立ちしか。(六)皇大神宮の尊き由來をのべよ。

難語句

御德（ごとく）　おんなさけ（女性）　けがされしかば（穢）　いき馬の皮をはいでおなくもつん（天照大神）げになつたことをいふ　皇孫（くもつ）の御まご　皇位（天皇の御位）　きはまりなかるべし（極）　りが（利）ない　萬世一系（ばんせいいつけい）天皇のおんちすぢが何萬年たつてもただひとすぢでかはらないこと　あがめたてまつれ（崇）　たつとびなさい

天照大神

天照大神は天皇陛下の御先祖で御德きはめて高く、はじめて人民に農業養蠶の方法をお敎へなされ給うた。

大神の御德

一、素戔嗚尊は御生れつきあらあらしく大神の機屋をけがしたので大神は天の岩屋にかくれ給うた。

二、神々は心ぱいなされて岩屋の前で神樂をなされた。大神が少し戸を開けてのぞき給うたので手力男命が御手をとつてお出したてまつつた。

素戔嗚尊は神々に追はれ出雲にくだり簸ノ川上で大蛇を斬り、尾から出た劔を奉つた。之を天叢雲劔と申す。

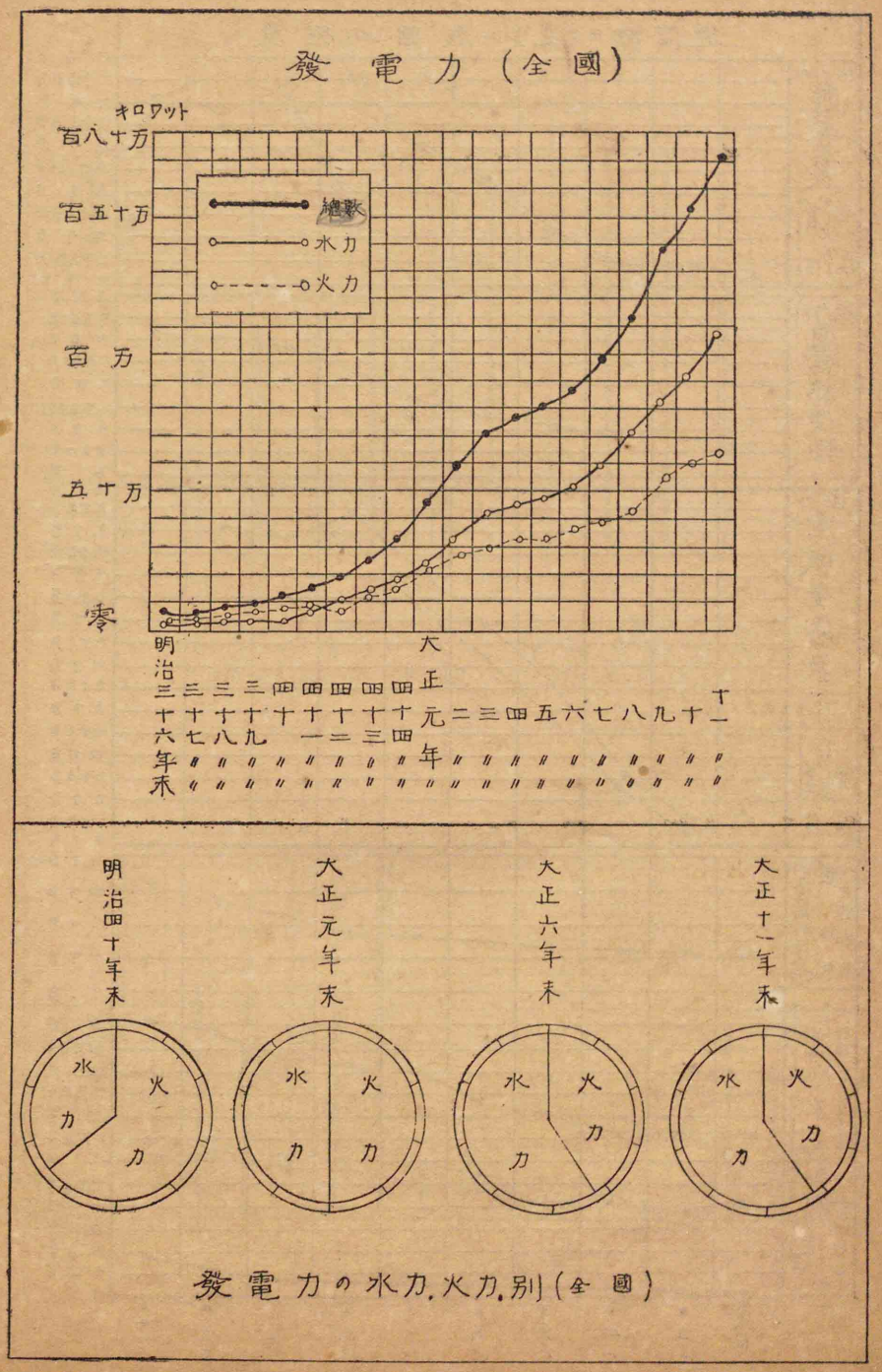
天孫降臨

一、大神は御孫瓊瓊杵尊をこの國に降し給はんとおぼしめし、素戔嗚尊の御子大國主命の平げ給うた出雲地方を大神にたてまつらせ給うた。

二、大神は瓊瓊杵尊に「此の國はわが子孫の王たるべき地なり汝皇孫ゆきて治めよ皇位の盛なること天地と共にきはまりなかるべし。」と仰せられた。

三、またその時三種の神器（八坂瓊曲玉・八咫鏡・天叢雲劔）を皇位の御しるしとしてたまうた。

伊勢の皇大神宮はこの御鏡を御神體として祭りたてまつる。



自習問題

(一)神武天皇の御東征の順路を略圖にて答へよ。(二)紀元節及び神武天皇祭は如何なる日か。(三)神武天皇が御先祖の神々を祭られしことにつき語れ。

難語句

はびこりて　浪速（今の大阪のへん）　御軍（天皇方の大きなもの）　しるべとして　雹（あられ）　即位の禮（天皇がおくらゐにつくぎしき）　ひとしくやうに　御先祖（天照大神をはじめ代々の神様がた）　帝國の基（日本の國のおほもと）

神武天皇

日向を出でたまふ

一、神武天皇の御時までは御代々日向にましましてわが國を治めたまうた。

二、東の方には、わるものどもがはびこつてゐたので、天皇は舟軍をひきゐて大和に向ひ給うた。

大和を平げたまふ

一、わるものどもの頭長髓彥が、御軍をふせぎたてまつつたので、道を紀伊にかへさせたまうた。

二、道がけはしくて御なんぎなされたまうた。

三、再び長髓彥を討ち給うたが敵はなかなか強い、その時一天にはかにかきくもり、雹が降りどこからか金色の鵄が飛んで來て天皇の御弓のさきにとまり光の強いのに目がくらみ、わるものどもは大いにやぶれ長髓彥も殺された。

御即位の禮を行ひたまふ

一、天皇は畝傍山の東南橿原に宮をたて、御即位の禮を行ひたまうた。この日を紀元節といひ、この年をわが國の紀元元年とする。

天皇のおてがら

一、天皇は鳥見山に、御先祖の神々をまつり給うた。

二、天照大神の定め給うた帝國の基をいよ〳〵固くしたまうた。御かくれ遊した日を、神武天皇祭といふ

自習問題

(一)景行天皇の御時代に都を離れた遠き地に於ける有樣は如何。(二)日本武尊が熊襲を平げ給ひし御有樣を語れ。(三)日本武尊が東國の蝦夷を平げ給ひし次第につき語れ。(四)日本武尊の御功績につきのべよ。

難語句

熊襲（今の日向・大隅・薩摩の地方）　川上のたける（わるものの名）　蝦夷（昔日本にひろかしらの人種）　欺きして　鹿がりせんとて（鹿を狩りとらうとて）　みちびきいして　弑し（下のものが、上のお方をころすこと）　薙ぎはらひ（きりはらひ）　おのがじぶんが　途中（みちのなか）

日本武尊

神武天皇が大和を定め給うてから、朝廷の御威光はおひおひ四方にひろがつたが、遠い國の人民は時々そむいた。

熊襲を平げ給ふ

一、第十二代景行天皇の御代に熊襲がそむいたので、天皇は御子小碓尊に之を討たしめ給うた。

二、尊は御生れつき御くわつぱつで、御力強く、御年十六で九州に至り給うた。

三、熊襲の頭川上のたけるが酒もりをしてゐた夜、尊は少女の御姿になられてたけるに近づき之をさし殺し給うた。日本武尊の御名はこの時川上のたけるがたてまつつたのである。

蝦夷を平げ給ふ

一、後、尊はまた東國征伐にいさんで御出發なされ、伊勢神宮で天叢雲劍をいただいて向ひ給うた。

二、駿河のわるものどもが、尊を野中で燒き殺したてまつらうとしたが尊は劍で草を薙ぎ、かへつて尊に殺された。天叢雲劍はこれから草薙劍と申す。

三、東國の蝦夷は弓矢をすてて降參した。かくて常陸地方まで至り給ひ國々を平げ、御かへりの途中に病にかかり薨じ給うた。

尊の御てがらによつて、遠い國々もよく治まるやうになつた。

自習問題

(一)神功皇后が新羅を討ち給ひし次第を語れ。(二)三韓が皇威に服せしことにつき言へ。(三)神功皇后の御功績を數へあげよ。(四)三韓征伐の御順路を略圖で答へよ。

難語句

みゆきして　なつて、香推の海　筑前の國にある海　みづら　上古男が髪を左右に分け兩耳のあたりでむすんだ一種の髪のゆひかた　いますこ　いらつし　神兵　神樣のいくさ　いかでか　どうして　ちかひ　かたくやくそくして　貢　みつぎぞくくから一定の時に奉る品物　凱旋　いくさにかつてかへること

神功皇后

神功皇后は仲哀天皇の皇后にましまし、御生れつき賢く、ををしくあらせ給うた。

新羅御征伐

一、仲哀天皇は皇后と共に九州にみゆきして熊襲を討ち給うたが、平がないうちにおかくれ遊された。

二、此頃朝鮮には新羅・百濟・高麗の三國があつて之を三韓といつた。

三、新羅は我國に最も近く勢が強いから、これをしたがへると熊襲も自ら平ぐと思召され、宿彌とはかり御自ら兵をひきゐて討ち給うた。(八六〇年)

四、御出發の時皇后は男の身なりになられ、人々に向つて「われ今より男のすがたとなりて軍をひきゐ、神々の御助けと汝等の力によりて新羅を討ちしたがへん。」と仰せられた。

三韓我國に從ふ

一、皇后舟いくさをひきゐ對島を經て新羅におしよせ給ふと王は大に恐れ降參し皇后は凱旋なされた

二、百濟・高麗もまた我國にしたがつた。

皇后の御てがらによつて、朝鮮はみな天皇の御德になびき、第十五代應神天皇の御代には仁王といふ學者が來、又機織鍛冶などの職人も來て我國はますます開けた。

自習問題

(一)仁德天皇の深き御仁慈につき語れ。(二)當時の人民が如何に皇室をしたひ奉りしかをのべよ。(三)仁德天皇が農業をすゝめ給ひしことにつき語れ。

難語句

難波　今の大阪　質素　おごらないこと　稅　ぜいねん　御衣　おんきもの　豐年　こくもつがよくみのつたとし　ゆたかになり　お金や品物がありあまるほどになつて　われすでに富めり　自分はもうお金持になつた　工事　ふしんをすること　堤をきづかせ　どてをつくらせ

仁德天皇

萬民をめぐみ給ふ

一、第十六代仁德天皇は應神天皇の御子にましまし、御なさけ深く、常に人民をあはれみ給うた。

二、都は難波で皇居はひじやうに御質素であつた、或日天皇が高い御殿から四方をおのぞみなされ、民のかまどの煙の少ないのを御心配になつて三年の間稅を免じ給うた。

三、皇居はあれ損じ給うても御心にかけ給はず、御衣さへ新にはつくらしめ給はなかつた。

一、豐年がつゞいて民のかまどの煙も盛んになつたのを御らんなされて「われすでに富めり。」と仰せられた。

人民皇居を造りたてまつる

二、皇居があれたので人民は新に造りたてまつらうと御ねがひしたけれども御ゆるしがなかつた。

三、人民はしきりに御ねがひしてさらに三年の後に御ゆるしがあつたので、人民はよろこんで皇居をつくりたてまつつた。

農業をすすめ給ふ

一、天皇はなほ人民のためをはかり給ひ、堤をきづかせ池をほらせ、農業をすすめ給うた。

二、人民は天皇の御恩に感じ、世の中はよく治つた。

自習問題

(一)聖德太子の御賢明におはせしことにつき語れ。(二)如何に支那と交際し給ひしかを語れ　(三)聖德太子が佛敎を大に盛んにせられしことにつきのべよ。(四)太子のうせ給ひし時人民は如何に慕ひ奉りしか。

難語句

一時(いちじ)によく十人(じふにん)の訴(うつた)へを聞分(きこわ)け　一どに十人のものの言ふことを聞きわけて

十七條(じふしちでう)の憲法(けんぱう)　國書(こくしよ)ら國(くにから)おほもとのきそく十七でう

官民(くわんみん)やくにん　官民(じんみん)

國書(こくしよ)ら國(くにから)への手紙

日出(ひい)づる處(ところ)　日本の國をいふ

日沒(ひつ)する處(ところ)　支那の國をいふ

恙(つつが)なきかはいなか　恙なきかはいなかは

留學生(りうがくせい)　支那へいつて學問する人

聖德太子

聖德太子は推古天皇の御甥にましまし御生れつき人にすぐれて賢く、學問にすぐれさせ給うた。

御まつりごと

一、推古天皇は女帝にましましたので、政は太子に御まかせ申し、太子は新しい政治をはじめ給うた。

二、太子は朝鮮・支那のよい所をおとりなされ十七ヶ條の憲法を定めて官民の心得となされ給うた。

支那と交際し給ふ

一、支那はその頃國強く、學問も進んでゐたので使を支那に遣し、じきに支那から學問をとり入れ給うた。

二、我國の威げんを示すために、國書に「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す恙なきか。」と書かせ給うた。

佛敎をおこし給ふ

一、第廿九代欽明天皇の御代に、佛敎が百濟から傳つた。

二、太子は深く佛敎を信じ給ひ多くの寺を建て、御自ら敎を說かれ給うた。

三、法隆寺は太子の建て給うた寺で、主な建物は昔のままであるといはれてゐる。

聖德太子は我國の利益をはかり給ひ、御位につきなさらぬ前にかくれさせ給うたので人民はたいそう悲んだ。

自習問題

(一)蘇我氏の無道なりし點をあげよ。(二)中大兄皇子等が如何にして蘇我氏を亡し給ひしかをのべよ。(三)大化の改新とは如何なることか。(四)天智天皇兵をいだして百濟をすくはさせ給ひしことを語れ。(五)大寶律令とはいかなることを定めしものか。(六)藤原鎌足の大功につき語れ。

難語句

陵(みさき)　天子樣のお墓

蹴鞠(けまり)の御遊(おんあそび)　まりをけるあそび

貢物(みつぎもの)　ぞくぞくから毎年時をきめて品物を本國へ奉つて來ること

大極殿(だいこくでん)　天皇が政治をとらせ又儀式を行はせ給ふごてん

誅せんとし(ちうせんとし)　殺さうとし

君臣(くんしん)の別(べつ)　君と臣とのわかち

政治(せいち)にあづかりまつりごとにくわんけいして　政治にはふわんけいして

律令(りつりやう)はふれい　律令はふれい

姓(せい)みやうじ

天智天皇と藤原鎌足

蘇我氏の我がまま

一、蘇我氏は推古天皇の御代に最も勢强く、蝦夷は三天皇に仕へ自分等父子の墓を作り、之を陵といひ、子の入鹿は聖德太子の御子孫を遂に亡した。

二、中臣鎌足は之を見て怒り、蹴鞠の御遊に中大兄皇子と御近づきになり、後、韓使入貢の御儀式の時、大極殿で入鹿を殺し、蝦夷もついで自殺した。

孝德天皇　御位につかせ給ひ大化と年號をたて給ひ、皇太子中大兄皇子は天皇を助け奉つて大いに政治を改め給うた。之を大化の新政といふ。(一三〇五年)

齊明天皇　は皇極天皇の重祚なされた方で百濟を助け給うた時九州の行宮におかくれあそばされた。

天智天皇

一、中大兄皇子御卽位なされて天智天皇と申し、百濟が亡んだので朝鮮と交際を絕ち給うた。

二、近江國に都をおうつしなされ、法令を新にし政治を改め給うた。この法令は第四十二代文武天皇の御代に出來上つた。之を大寶律令といふ。

藤原鎌足　は蘇我氏を亡してから二十餘年間朝廷に仕へて重せられ、功によつて藤原の姓を賜はつた。

自習問題

(一)奈良時代とはいかなる時代か。(二)奈良時代中最も盛なりし當時の有樣をのべよ。(三)聖武天皇が佛敎をひろめ給ひしことを語れ。(四)奈良の大佛につき知る所を言へ。(五)光明皇后の御仁慈にあらせられしことにつき語れ。

難語句

御七代(元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の御七代)　宮殿(きうでん)　はなやかで　佛敎(ぶつけう)(シヤカといふ)　太平(たいへい)やか　國分寺(こくぶんじ)(國々にあるお寺)　大佛(だいぶつ)を鑄て(大佛をつくつて)　なさけ深く(あはれみたまふお心が深く)　藥(くすり)を施す(くすりをめぐんでやる)　孤兒(こじ)(みなしご)

聖武天皇

奈良時代

一、上古の都はたいてい御代ごとにかはる習はしであつた。

二、(第四十三代)元明天皇は奈良に都を御定めなされ、奈良はこれより七代七十餘年間の都となつた。(一三七〇年)

佛敎盛んとなる

一、(第四十五代)聖武天皇の御代は奈良時代で最も盛んな時で、唐と交通し都も立派になり、世の中も開けた。

二、聖武天皇の御代には佛敎は最も盛んであつた、それは天皇の御熱心な御敎へと御信心による。

三、國毎に寺を御建てなされ之を國分寺といつた。

四、大和國の國分寺として東大寺を御建てなされた。大佛の高さは五丈三尺五寸で大佛殿の高さは十五丈餘で、木造では世界第一である。

光明皇后は聖武天皇の皇后にましまし、藤原鎌足の御孫にあたらせ給ふ。御なさけ深く貧しき人々の爲に病院を建てて藥を施し、孤兒を集めて救ひ給うた。

自習問題

(一)僧行基はいかなることをせられし人か。

(二)和氣清麻呂の誠忠なる行につき語れ。

(三)和氣廣虫といふ人はいかなる行をせし人か。(四)清麻呂が宇佐から歸つて天皇に申上げし神の敎をかけ。

難語句

すぐれたる僧(えらいばうさん)　舟つき(ふねのつく)　みなと　無道(ぶだう)の僧(人のみちにはづれたばうさん)　へつらへるもの(心にないことをいつて人のきげんをとるもの)　官位(くらゐ)　除く(とりのける)　はばかること(ゑんりよする)　ところなく(ところなく)　朝廷(てうてい)(天皇の國政をきゝたまふ所)　かつてまで

和氣清麻呂

行基と道鏡

一、行基は公益をひろめ人民のためをはかつた。

二、道鏡は稱德天皇に仕へ、ついに皇位をうばはうと考へた無道の僧である。

和氣清麻呂の忠義

一、和氣清麻呂は天皇の命をうけて、道鏡のまごはしの言葉には耳をかたむけずに、宇佐八幡の神勅を受けに行つた。

二、歸つてから「我國には君臣の別がある、臣下の無道なものは早くしりぞけよ。」との神勅を申し上げた。

三、道鏡は大いに怒つて清麻呂を大隅に流し、途中で殺させようとまでした。

四、清麻呂の忠義はまもなく朝廷に知られ、召しかへされてますます天皇によく仕へ、後には姉と一しよに護王神社に祭られた。

和氣廣虫は清麻呂の姉で、弟におとらない心がけな人で、弟の流されたとき流されたが召しかへされた。八十人もの捨子を育てたほどの同情深い人である。

自習問題

(一)桓武天皇の御時代に何故に都を今の京都にうつされしか。またそれがいつまでつづきしか。(二)平安京の制の大體を描いて今の京都とくらべて見よ。(三)坂上田村麻呂はいかなる武人なりしか。

難語句

建議(けんぎ)　かんがへを申し上げること　山河(さんが)　山や河のけしきがうつくしく　内裏(だいり)　天皇のましますところ　紫宸殿(しんでん)　正殿で大禮を行はせ給ふ所　猛獸(もうじう)　たけきけもの　いたる所(ところ)　いく所い　薨ぜり(こうしなれた)　出征(しゅつせい)　いくさにでること　武運(ぶうん)　いくさにでてかつやうに

桓武天皇と坂上田村麻呂

平安京

一、和氣清麿の建議により、景色がよく、便利である京都に都を定め給うた。之を平安京といひ、明治の御代の前まで都となつた。(一四五四年)

二、平安京の制は南北に通ずる中央の大道で、左。右の京に分け縱横に碁盤目に道路を作り、中央の大道の北端に大内裏があり、其中に内裏、諸官省があり、内裏の中に紫宸殿がある。

三、今の京都の平安神宮は第十五代桓武天皇を祀つたもので、この形は昔の大極殿といふ儀式を行ひ給うた御殿の形につくられてゐる。

蝦夷征伐

一、日本武尊が御征伐なされた後に蝦夷がそむき、齊明天皇の御代に阿部比羅夫が日本海岸の蝦夷を平げた。

二、坂上田村麻呂は生れつき武勇で同情深い人であつた。征夷大將軍となつて、東北地方の蝦夷を平げた。

三、田村麻呂は功によつて高位をさづけられ、薨じてから武運の神として山科に祭られた。

自習問題

(一)弘法大師の生立につきのべよ。(二)弘法大師が眞言宗を傳へられしことを語れ。(三)弘法大師學問をひろめられしことを言へ。(四)弘法大師が公共事業に盡されし事蹟をあげよ。

難語句

神童(しんどう)　人なみすぐれてかしこい子　御信用(ごしんよう)を得て　天皇さまに深く用ひられて　詩文(しぶん)　しやぶん　應天門(おうてんもん)　大内裏にある御門　堤(つつみ)を築(きづ)く　どてをつくる　工事(こうじ)と　おしごと　くり名(な)　しんでからおくられる名

弘法大師

弘法大師は空海といひ、讃岐の人で、生れつき神童のほまれあつた上に、學問をはげんだ。

佛敎をひろむ

一、桓武天皇の御代に唐に渡り佛敎を學び、三年の後かへつて我國に眞言宗を傳へた。

二、嵯峨天皇の御信任によつて、高野山を開き、佛敎はますます盛んになつた。

學問をすすむ

一、空海は學問深く、京都に學校をおこして、貴賤の別なく廣く人々の入學を許して之を敎へた。

二、詩文をよくし、ことに文字が上手で、朝廷の命をうけて應天門の額を書き、後に點をおとしたことを知つて筆をなげあげて點をおぎなつたといふ話がある。いろは歌も空海が作つたといはれてゐる。

世の利益をおこす

一、讃岐の萬農池の堤を築くのに、なかなか出來上らないのを空海が助けたらすぐ出來上つた。

二、空海は世の利益をおこし上下のうやまひ厚く、後に朝廷から弘法大師といふおくり名を賜つた。

自習問題

(一)藤原氏が政治をほしいまゝにせしことを語れ。(二)宇多天皇が菅原道眞を重く用ひられしはどんな御考なりしか。(三)醍醐天皇の御仁德につき言へ。(四)菅原道眞が筑前にうつされし顚末をのべよ。(五)道眞が筑前にありし時の有樣を語れ。(六)天滿天神の由來につき言へ。

難語句

一門(いちもん)　しんるゐ　攝政(せつしやう)　天皇(てんのう)にはかつて國の政(まつりごと)をとるおやく　關白(くわんぱく)　天皇をたすけて國のまつりごとをとるやく　緣(えん)なき　ものいものゆかりなき　明君(めいくん)　かしこい君(きみ)　讒(ざん)せり　わるくいつた　こち　春の風　御感(ぎよかん)に入り(おきに入り)　恩賜(おんし)　天皇からいただいたもの

菅原道眞

- 藤原氏勢を得
  - 一、平安京のはじめは朝廷の御威光が盛んであつたが、まもなく藤原氏が勢をふるふやうになつた。
  - 二、鎌足が大功をたててから其子孫は高官にのぼりやがて朝廷の政治を勝手にするやうになつた。
- 道眞政治にあづかる
  - 一、第五十九代宇多天皇は藤原氏のあまり勢の強いのを御心配なされて、その勢をわかたうと菅原道眞を用ひ給うた。
  - 二、第六十代醍醐天皇は宇多天皇の御子にましまし、御なさけ深い明君におはしました。
  - 三、醍醐天皇の御代道眞は右大臣時平は左大臣となつて、共に政をとつた。
  - 四、道眞は學者の家に生れ幼時から學問をはげみ、又心正しく朝廷に仕へたので最も天皇の御信任を得た。
- 筑前に流さる
  - 一、時平は家がらがよくても道眞ほど智慧も學問もなく、又、天皇の御信任もないので不平でたまらず、遂に道眞を天皇に讒した。
  - 二、道眞は官をおとされ筑前の太宰府に流された。

天滿天神道眞は流されてからも一日として天皇を御忘れ申したことはなく、三年目に薨じたが罪のないことが後で知れ、高い官をさづけられ天滿天神に祭られた。

自習問題

(一)藤原氏が勢力を得るに至りし次第をのべよ。(二)藤原道長が榮華をきはめし有樣を語れ。(三)道長・賴通父子の專横な振舞を言へ。(四)攝政・關白とは如何なる重職か。

難語句

遊樂(いうらく)　あそびたのしんでのみくらす　榮華(えいくわ)　はでなこと　曾孫(そうそんひまご)　外孫(ぐわいそん)　自分のむすめが他家へおよめいりしてうんだ孫をいふ　ほこれる　さまじ　まんする　ありさま　公卿(くぎやう)　攝政・關白・大臣・參議・大中納言及び三位以上の人たちをいふ　令(れい)　いめ　國々(くにぐに)のつかさ　をさめる　やくにん　專横(せんわう)　わがまゝ

藤原氏の專横

- 藤原氏ひとり勢を得
  - 一、菅原道眞がしりぞけられて宇多天皇の御志はむなしくなつた。
  - 二、藤原氏はますます勢を得ひとりで朝廷の政治をとり、榮華にふけり道長の時は最も盛であつた。
- 道長の榮華
  - 一、道長は時平の弟忠平の曾孫である。
  - 二、道長は第六十一代一條第六十七代三條第六十八代後一條の三天皇に仕へて勢をふるひ其女は三人まで皇后となり、外孫に當らせ給ふ皇子は三人まで御位につかせ給ひ、後一條天皇の御代には攝政となり「この世をばわが世とぞ思ふ望月の、かけたることもなしと思へば」といふ歌をつくつたほどで、榮華のかぎりをつくした。
- 一門の專横
  - 一、道長の富は朝廷にもまさり、法成寺を京都に建てたときには公卿等に命じて、宮中・諸官省などにある石を取つて建築場に運ばした。
  - 二、子賴通は父が病にかかつたので令を下し「朝廷の事はあとまはしとすとも、法成寺の御用は怠ることなかれ。」といつた。公卿等はきそつて材料をたてまつつた。賴通も弟の敎通も攝政・關白となつた。

自習問題

(一)關白藤原頼道及び關白藤原教通が後三條天皇をはゞかり奉つたのは何故か。

(二)後三條天皇が政事に勵み儉約を守り給ひしことを語れ。(三)院政とは如何。

難語句

東宮(とうぐう)皇太子　師(し)として　内外(ないがい)の歴史(れきし)日本や支那の歴史　氏寺(うぢでら)代々の祖先のゐはいのある寺　官吏(くわんり)にん　御膳部(ごぜんぶ)日に三度の御しよくじ　拝観(はいくわん)者をがみるもの　御在位(ございゐ)天皇の御位にあること　折(をり)からそのとき　かくもなに　院中(ゐんちう)上皇の御所の中

後三條天皇

藤原氏は道長頼通の後、後三條天皇の時代から衰へはじめた。

頼通天皇を恐る

一、(第七十一代)後三條天皇は(第七十代)御冷泉天皇の御弟にましまし、御年十二で皇太子となられ二十年間東宮にいまし、御生れつき嚴格にましました。

二、天皇の御母は藤原氏の出でおはさなかつた。

三、天皇は大江匡房について學問をはげみ給うた。

四、頼通は天皇を恐れて御卽位の前に隱居して、弟教通に關白職をゆづつた。

關白教通は藤原氏の氏寺である興福寺の南圓堂を再建しようと

天皇に願つたが、御許しがないので一族と共に朝廷から引退いた。やむなく天皇は御許しなさつた。

政治にはげみ給ふ

一、天皇は儉約を旨とし官吏の奢りを止め給うた。

二、天皇は御在位五年で(第七十二代)白河天皇に御位をゆづり、まもなく御崩御遊した。さすがの頼通さへ惜み奉つた。

白河天皇の院政

一、白河天皇は御父君にならひ藤原氏には政治をお任せなさらなかつた。

二、天皇は御位をおゆづりなされても院中で政治をおとりなされた。之を院政といふ。

自習問題

(一)當時地方に武士の起りしは何故か。(二)前九年の役につき述べよ。(三)後三年の役につき語れ。(四)源義家が智仁勇の名將なりしことにつき語れ。(五)新羅三郎義光が兄義家を助けしことを言へ。(六)後三年の役後源氏が勢を殊に東國に得しは何故か。

難語句

才氣(さいき)たらきは　かすめ取(とり)とつて　誅(ちゆう)せりした　兵糧(ひやうらう)へいしの　主從(しゆうじゆう)主人とけらい　からうじて(やく)　館(たやかた)　衣(ころも)のたてはけて、ほころびだしたといふいみ　つがひたる　矢には　さんだ　神恩(しんおん)神樣のごおん　兵法(ひやうほう)いくさのしかたに　抗(かう)せり　てむかひをした　伏兵(ふくへい)かくれてゐる　部下(ぶか)　けら　剛(がう)の者(もの)　すぐれてつよい　請(こ)ひ　ねがいもの

源義家

藤原氏が地方の政治をかへりみないうちに、藤原氏におさへられてゐた人々は地方に下つて武士となつた。

前九年後

一、源義家は頼義の長男である。後冷泉天皇の御代に陸奥の安倍氏がそむきいたので、父頼義と共に討つて之を平げた。

二、頼時の子貞任・宗任は勢がなかなか強かつた。

三、出羽の清原武則の助けで貞任・宗任の亂を平げた。

四、衣川の戰でなさけ深い義家は、貞任を殺さずにのがしてやつた。

八幡太郎義家は京都に歸つてから大江匡房に兵法を敎へられた

一、安倍氏にかはつて清原氏が勢を得、白河天皇の御代に其の子孫の間に爭があつて奥羽が又亂れた。

後三年役

二、義家は先に金澤に武則の子武衡を攻めその時亂れた雁によつて伏兵を知り之をみな殺しにした。

三、義家の弟新羅三郎義光は京都から來て兄を助けた。

四、義家は毎日の戰を見て兵士の剛膽の席を分けた中にも鎌倉權五郎景正は十六歳で武名をあげた。

五、(第七十三代)堀河天皇の御代とうとう武衡等は城を燒いて逃げた。

義家は朝廷から戰功を與へられないので自分の財産をわけた。

自習問題

(一)保元の亂の顚末につき語れ。(二)源爲朝の武勇につき言へ。(三)平治の亂の顚末につき語れ。(四)平重盛と源義平との紫宸殿の前に於ける決戰を語れ。(五)平氏が如何にして勃興せしかをのべよ。

難語句

權力(けんりよく)　他人をおさへ他人を服從させる威力　某(それがし)　自分を　合(かつ)戰(せん)　敵と戰ふこと　へろ〳〵矢(やよわくてしつかりせぬ矢)　風上(かぜかみ)　風の吹いて來る方　高(たか)き官(くわん)　近衞大將をさす　除(のぞ)かんとりのけよう　勅(みことのり)して　おほせになつて　左近櫻(さこんのさくら)紫宸殿の階下の左方に植ゑてある櫻　右近橘(うこんのたちばな)紫宸殿の階下の右方に植ゑてある橘

平氏の勃興

平氏は桓武天皇の後で一時は源氏をしのぐ勢であつた。

保元の亂

一、藤原頼長は兄關白忠通に代らうとして仲惡しく、(第七十代)後白河天皇の保元元年頼長は天皇の御兄崇德上皇の御子重仁親王を御位につけたてまつり、自分は關白とならうとして、上皇にすすめて兵をあげた。

二、爲義と子爲朝は上皇方に、清盛・義朝は天皇方になつた。

三、爲朝は武勇人にすぐれ夜討のはかりごとを申し上げたが許されず、天皇方に敗け上皇は讃岐にうつされ頼長は死に、爲義は斬られ爲朝は流された。

平治の亂

一、保元の亂後平清盛だけ勢よく藤原通憲と仲のいいのを見た義朝は藤原信頼とむすび、共に之をのぞかうとした。

二、平治元年清盛と子の重盛が熊野參詣に行つた時通憲を討たうとしたが通憲は逃げ途中で死んだ。

三、義朝等は上皇の御所を燒き、上皇と天皇をおしこめたてまつつた。

四、清盛は急に京都にかへり天皇を自家に迎へ上皇ものがれ給うた。戰の後義朝は敗け東國に走らうとして途中で殺され信頼・義平もまもなく殺された。

自習問題

(一)保元平治の亂後平氏が全盛をきはめし有樣をのべよ。(二)平清盛の專横と其の子重盛の忠孝とにつき語れ。(三)平重盛が何といつて父を諫めしか、其の意味をかけ。

難語句

官位(くわんゐ)　官(くわん)と位(くらゐ)　太政大臣(だじやうだいじん)　太政官の長官で一番高い官　御心(みこころ)にまかせず　お心の思ふとはぢりにならず　法皇(ほうわう)　佛門に入りし太上天皇を稱し奉る　溫順(おんじゆん)　おとなしいこと　官人(くわんじん)　つかさびと　武裝(ぶさう)して　いくさのしやうぞくして　朝敵(てうてき)　朝廷に手向ふ所の敵　近衞大將(このゑたいしやう)　近衞府の長官で、近衞兵をひきすべて皇居を守る官　皇威(くわうゐ)　天皇のご威ゐせい

平重盛

平氏の全盛

一、保元平治の亂の後は源氏衰へ平氏だけ榮えた。

二、清盛の威勢はますます加り太政大臣まで進み、後髮を剃つて太政入道といつた。

三、一族もみな高官にのぼり一門の領地は三十餘國藤原氏にもまさる榮華をつくした。

清盛のわがままと重盛の忠孝

一、清盛は勢にまかせてわがままであつた。御白河上皇はこれをおさへようとなさつたが御心にまかせず、法皇となり給ひ、近侍の僧俊寛等は平氏を亡さうとしたが、はかりごとがもれて、捕はれた。

二、重盛は忠孝の心厚く清盛が俊寛を殺さうとしたのを諫めた。

三、清盛は法皇をおしこめたてまつらうとして一族を招き武裝をした。重盛が「朝敵はどこにゐるか、自分は近衞大將である。」といつたのをきいて、清盛ははづかしく思つて法衣を引きかけて重盛に逢つた。

四、重盛ははらはらと涙を流して「君恩を受けてゐる平氏が皇威を輕んじたなら、神罰にあたるであらう。父上聞入れ給はないならば重盛の首をはねてからこの事をやつてください。」といさめた。

自習問題

(一)源頼政が兵を擧げし原因と其の結果とにつき語れ。(二)源頼朝兵を起せし次第を語れ。(三)源義仲が兵を擧げしことにつき語れ。(四)源平二氏の富士川・一の谷・屋島・壇の浦等における戰につき其の有樣をのべよ。(五)源頼朝と源義經との人となりを語れ。また何故に義經が殺されしかを言へ。(六)源頼朝の政治及び武士の勇氣を養ひしことにつき語れ。

武家政治の起(一)

清盛は重盛が死んでからますます横暴をきはめた。

源頼政は以仁王を奉じて平氏を亡さうとしたが敗けて死んだ。

頼朝兵を擧ぐ

一、源頼朝は義朝の子で平治の亂の時十四で伊豆に流され、二十年の間北條時政にたよつてゐた。

二、頼朝は東國の人々を從へて鎌倉に兵を擧げた。

三、維盛の兵と富士川をはさんで對陣した、平氏の軍は水鳥の羽音に驚かされて逃げかへつた。

源義經は平治の亂の後一時鞍馬山に居たが、後平泉の藤原秀衡の處にたより、頼朝擧兵の時來つて兄を助けた。

源義仲

一、源義仲は頼朝の從弟で水曾の山中に育ち頼朝が兵を擧げたとき維盛の軍を倶利加羅谷で破つた。

二、平氏は清盛が病死し、其の子宗盛は一族と共に第八十一代安德天皇を奉じて西國におちて行つた。

三、義仲は京都に行き後白河法皇から平氏追討の命を受けたが、勢にまかせて亂暴なので頼朝に討たれ、宇治川に敗れて近江の粟津で討死した。

四、宇治川では佐々木高綱が梶原景季を追ひこして先陣の譽をあげた。

難語句

おもむろに　しづかに　回復の時　勢力をとりかへす時　系圖　先祖代々からの血統の表をかいた一家族の表　追討の　命のめいれい　先陣　いくさのさきがけ　けなげ　なる若武者　いさましき若武者　いみてつて　なびき　草木が吹く風にたふれるやうに悉く從うて　從ひ　質素なる生活　所の生活　かつてい　武藝　劍術・弓術・馬術などをいふ　征夷大將軍　兵馬の權をにぎつて征討に從事する役　政廳　まつりごとをとるやくしよ　幕府　將軍が政事をとるやくしよ　遺憾　ざんねんのいみ

武家政治の起(二)

一谷の戰

一、平氏は勢をもりかへして攝津の福原に據つた。

二、弟範頼義經に命じて福原を討たしめた範頼は生田から義經は鵯越から攻め宗盛は屋島に逃げた。

三、平敦盛が騎馬のまま沖の船に行かうとした時熊谷直實が呼び返し組討して直實に首をかかれた。

屋島の戰

一、義經はすぐ屋島に攻めよせ城に火を放つた。宗盛はまた天皇を奉じて西海に逃げた。

二、此の戰に那須の與一は扇のかなめを射、譽をあげた。

三、佐藤繼信は義經の身代りとなつて忠死した。

壇浦の戰

一、壇浦で義經にまた破られ平氏は大方死んだ。

二、安德天皇は清盛の妻二位尼にいだかれ海に入り給うた。時に御年八歳におはしました。

義經は大功をたてたが頼朝之をいみ平泉に居たのを泰衡に殺させ義經をかくまつた罪で泰衡も頼朝に亡された。

頼朝の政治

一、國内平らぎ頼朝は質素・儉約・武勇をすすめた。

二、頼朝は征夷大將軍となり遂に天下の政治をとつた。そして政廳を幕府といつた。(一八五二年)

三、武家政治はこれから始つて七百年もつづいた。

自習問題

(一)源氏亡びて北條氏が之に代つて幕府の政をとるに至りし次第を語れ。(二)承久の變の原因と結果とをのべよ。(三)後鳥羽上皇の隱岐の御所に於てのいたましき御有樣を語れ。

難語句

いさゝかの血緣わづかの　幼主藤原　賴經の日課毎日きめてすること　政權まつりごと　のけんりよく　あまつさへ上その　廢立はいしたりたてたり　六波羅京都の六波羅に南府と北府とを置いて畿內・西國の政治を行はさせた　憂き年月悲しい年月　新島守島の新しい番人　こゝろして吹けて氣をつけてふけ

後鳥羽上皇

北條氏執權となる

一、賴朝は一族をうとんじ殺した爲に勢が衰へた。
二、北條時政は賴朝の妻の父で勢が最も强かつた。
三、賴家の子公曉は鶴岡八幡宮で實朝を殺し、公曉は時政の子義時に殺され、賴朝の子孫絕えた。
四、義時は賴朝といささかの血緣ある幼主を京都から迎へ、自分は執權となつて政治を專らにした。

承久の變

一、第八十二代後鳥羽天皇は御位をゆづつても政をとり給うた。
二、後鳥羽天皇は御生れつき嚴格にましまし政にはげみ給ひ北條氏から政權をとりかへさうと仲恭天皇の承久三年兵をあつめ義時を討たしめ給うた。
三、義時は子泰時等に軍をひきゐさせ遂に官軍を破り後鳥羽上皇を隱岐に、順德天皇を佐渡に土御門上皇を土佐に流し奉り仲恭天皇を廢し奉り第八十六代後堀河天皇を御位につけ奉る等橫暴をきはめた。

三上皇

一、義時は京都六波羅に一族のものをおいて畿內西國の政治をとらしめた。
二、三上皇は何れも遠地に憂き月日を送らせ給ひ遂にその地に崩じ給うた。誠におそれ多い事である。

自習問題

(一)北條時宗は幼少より豪勇の人なりしを語れ。(二)當時に於ける蒙古の勢力及び時宗が蒙古の來襲に對する決心を語れ。(四)弘安の役につきて言へ。(五)元寇の際龜山上皇が深く御心を痛めあそばされしことにつき語れ。

難語句

未曾有いまだかつてないこと　外寇外國から攻めに來たこと　豪氣心つよくてしつかりとしてゐること　臆する色くれする色　石壘こゝでは石がきのいみ　勢に乘じて　ほひにつけこんで　侵して　敵艦てきのぐんかん　沈沒しづむこと　大難元寇を　國難國のわさはひ　强敵つよい てき

北條時宗

北條時宗

一、時宗は生れつき剛勇で弓の上手であつた。第九十代龜山天皇の御代十八で幕府の政治をとつた。
二、時宗は末曾有の外寇をしりぞけ國威をあげた。

蒙古おこる

一、支那の北に蒙古がおこり西はロシヤから東は朝鮮半島までその領地にした。
二、蒙古は我國に無禮な書を送つた時宗は大いに怒つてその使をしりぞけた。

文永の役

一、蒙古は支那の大部をとり元と國名をつけ第九十一代後宇多天皇の文永十一年四萬人の兵をもつて對馬・壹岐をおかし筑前の博多に來たが、我軍の爲にしりぞけられた。
二、時宗は再び來た使を殺して博多灣を固めた。

弘安の役

一、元の國から弘安四年朝鮮を通つて四萬の大軍が來たが菊池武房・河野通有等になやまされ、支那から來た十萬の兵は大風の爲に溺れ死んだものが多く、諸將われ先にと逃れ去つた。
二、此の時は我國民は上下一致して國難にあたり、畏れおほくも龜山上皇は身を以つて大難に代らうと伊勢神宮に祈り給ひ、大難をまぬがれた。

自習問題

(一)後醍醐天皇が天下の政治につき常に御心に思ひ給ひしことにつき語れ。(二)後醍醐天皇が笠置山に行幸し給ひしことにつき語れ。(三)後醍醐天皇が笠置を落ちさせ給ふ際に詠ませ給ひし御製並にその時藤原藤房の詠みし返歌の意味を言へ。(四)護良親王が吉野を落ちさせ給ひし次第を語れ。(五)建武の中興とは如何。又その中興にあづかつて功ありし人々を言へ。

難語句

専横(せんおう)	ほしいまま
酒宴(しゅえん)	さかもり
人望(じんぼう)	人々の信頼
笠置山(かさぎやま)	山城と大和の國ざかひにある山
行在所(あんざいしょ)	かりのごてん
御徒歩(おかち)	かごにも何にものらないであゆむこと
義兵(ぎへい)	忠義の兵
自害(じがい)	自分で死ぬること
行宮(あんぐう)	かりのごてん
恩賞(おんしょう)	をやめて天皇に從ふこと
歸順(きじゅん)	そむく心

後醍醐天皇

第九十六代　後醍醐天皇は御生れつき英明にましまし、學問をはげみ政に御心を用ひさせ給ひ、政權をとりもどさうとし給うた。

笠置落ち

一、北條高時は暗愚で政治をかへり見なかつた。天皇の御はかりごとを知つて大兵を京都に向けた。

二、天皇は笠置山に行幸なされ給うたが、ことの外御難儀遊ばされ三日御食なく、遂には賊の手におち給ひ隱岐の島にうつされ給うた。

義兵四方に起る

一、楠正成は天皇の御召によつて笠置の行在所に行き、忠義を誓ひ赤坂城に據つて賊をなやました。

二、護良親王は吉野に據り給うたが賊軍におそはれ村上義光の忠死によつてからくものがれ給うた。

三、楠木正成は千早城を築き賊軍を又なやました。

四、名和長年は船上山に天皇を迎へたてまつつた。

五、足利尊氏は兵をひきゐて京都に上り、にはかに歸順し賊を六波羅に破つて京都を安らかにした。

六、新田義貞も歸順し遂に北條氏を鎌倉に亡した。

天皇は京都にかへり給ひ御自ら政をとり給ひ功臣を賞された。年號を建武と改め給ひ、建武中興と申し上げる。

自習問題

(一)足利尊氏は如何なる野心を以て事を圖りしか。(二)護良親王の御功績と御最後とにつき語れ。(三)尊氏九州に走りし後再び京都に攻め上りし次第を言へ。(四)楠木正成が何と言つて其の子正行を諭せしか。(五)楠木正成兄弟の最後の有様を物語れ。(六)楠木正成の誠忠を後世の人は如何に推賞敬慕し居るかを語れ

難語句

大義(たいぎ)	君や國にたいする道
野心(やしん)	こゝでは將軍にならうといふ心
讒(ざん)	わるくち
弑す(しいす)	下の者が上の者を殺すをいふ
おぼつかなし	見こみがない
衆寡敵せず(しゅうかてきせず)	多勢に小勢がかなはず
忠節(ちゅうせつ)	いつまでも心をかへないで忠義をつくすこと
朝敵(ちょうてき)	朝廷の敵
ささそう	手本
かゞみ	

楠木正成

尊氏野心をいだく

一、足利尊氏は大義にくらい武士をなづけ、自分は將軍となつて天下の政治をとらうと野心をいだいた。

二、護良親王は之を知つてのぞかうとし給うたが、かへつて尊氏に讒されて鎌倉におしこめられ、まもなく尊氏の弟直義の臣に弑せられ給うた。

尊氏遂に反す

一、尊氏は天皇に征夷大將軍とならうと御願ひしたが、御許しがないので鎌倉に據つて反した。義貞等破れ、京都を犯し天皇は比叡山に行幸なされた。

二、奥州の北畠顯家の義兵と正成・義貞の兵と、力をあはせ尊氏等を西國に走らし、天皇は京都に入り給うた。

三、尊氏は九州の兵をあつめ海陸から攻め上つた。

正成の誠忠

一、正成は京都を出發し櫻井驛で子正行に教訓をのこして湊川に陣をとつた。

二、直義の陸兵と尊氏の水軍を前後から受けて奮戰したが身に十一ケ所の傷を受け弟と共に刺しちがへて死んだ。

三、湊川神社は楠木正成を祭り境内に德川光圀の建てた碑がある。

四、正成は古今忠臣のかゞみといはれてゐる。

自習問題

(一)名和長年の勤王につき語れ。(二)新田義貞が鎌倉を攻めし以來北國に向ふまでの忠烈なる活動につき言へ。(三)新田義貞が北國に向ひし途中の困難なりし有樣を語れ。(四)金崎城の陷りし當時の有樣を物語れ。(五)新田義貞が藤島に戰死せし次第と其の功績とにつきのべよ

難語句

避(さ)けんが爲(ため)にがよけよう　還幸(くわんかう)天皇のおかへり　回復(くわいふく)とりもどす　大命(たいめい)天皇さまのご命令　からうじて　やうやく　にして　杣山(そまやま)越前の國にある　まさにもは　額(ひたひ)かみのはえぎはやら　まゆまでの間ふ　北國(ほくこく)北陸道の諸國をいい

新田義貞

- 名和長年戰死す
  - 一、義貞は湊川の戰に破れ京都にかへり、天皇は再び比叡山に行幸し給うた。
  - 二、義貞は長年等と京都をとりかへさうとしたが、長年は戰死した。長年は名和神社に祭られて居る。
- 吉野行宮
  - 一、尊氏は賊名をさける爲に豐仁親王を天皇とし後醍醐天皇にいつはつて降り還幸を請ひ奉つた。
  - 二、天皇は一時假に許し給ひ、義貞に命じて北陸に赴かしめ、神器を奉じて吉野に行宮を定め給うた。
- 金崎城おちいる
  - 一、義貞は恒良親王尊良親王を奉じて北國に向つた
  - 二、河野の一族は義貞等と木目峠を越える時、大風雪の中で敵兵と戰ひ主從三百騎は皆戰死した。
  - 三、義貞は越前の金ヶ崎城に據つたが賊に圍まれた、子義顯を城に止め杣山に兵を募りに行つたが城おちいり尊良親王は自殺し給ひ、皇太子恒良親王は京都に送られ遂に弑せられ給うた。
- 義貞戰死す
  - 一、義貞は杣山に起つて賊を破つたが、藤島の戰に大に奮戰し流矢に當り自ら首をはねて討死した。
  - 二、福井市にある藤島神社は新田義貞を祭る。

自習問題

(一)北畠顯家の忠死せし樣子につき語れ。(二)北畠親房の忠勤と功績とにつき言へ。(三)後醍醐天皇が吉野にて崩じ給ひし當時の御有樣につき物語れ。(四)楠木正行が心を決して瓜生野及び四條畷に於て戰ひし有樣をのべよ。(五)楠木正行が忠孝二つながらの道を全うせしことにつき言へ。

難語句

はびこりて　あこにもこにもねて　神皇正統記(じんわうしやうとうき)本の名　皇統(くわうとう)の由來(ゆらい)天皇のちすぢのよつてきたりしわけ　大義名分(たいぎめいぶん)君は君で臣は臣で永久にかはらないこと　拜謁(はいえつ)お目にかかること　かへらじこの歌(うた)もう再び生きて歸らぬと前から思つてゐるからして、今亡き人の數にはいる私共の名をこゝにかきとめて置いのへみ

北畠親房と楠木正行

- 北畠親房
  - 一、北畠顯家は尊氏を九州に走らした後義良親王を奉じて陸奥の靈山に據つたが天皇が行幸せられた時又京都に向ひ遂に和泉の石津に戰死した。
  - 二、忠臣あひついで戰死しても天皇は御志なほ固く顯家の父親房に義良親王を奉じ陸奥に下らしめ給うたが海上大風の爲に親王は吉野に還り給うた。
  - 三、親房は日夜敵を討つ謀をめぐらしつつ大義名分を明にする爲に神皇正統記を著した。その頃賊にくみするものがあつたからである。
  - 四、親房は城がおちいつたので、吉野に歸つて朝廷の爲に盡した。阿部野靈山神社は親房父子を祭る。
- 後醍醐天皇
  - 御病氣の爲に朝敵のはびこる世を恨み給ひながら行宮に崩じ給うた。義良親王卽位して第九十七代後村上天皇と申す。
- 楠正木行
  - 一、正行は十一で父に別れ父の遺言を守つて忠義をつくした。その頃官軍の勢強く尊氏は高師直に命じ正行にあたらしめた。正行は四條畷に戰死した。
  - 二、正行は忠と孝とを全うした武士で、又勇と仁とを兼ねた武士のかゞみである。四條畷神社は正行を祭る。

自習問題

(一)肥後の菊池氏が代々忠勤を勵みし次第を語れ。(二)菊池武光が懷良親王を奉じて西國に威を振ひし有樣をのべよ。(三)足利尊氏の不忠不義なりし點を列擧せよ。(四)筑後川の戰につき語れ。

難語句

おほむねかた　勤王のさきがけ　君のために働くことのさきがけ　奉じて　大將としていただいて　あまつさへ　その上　不義　臣としての道をつくさないこと　にくみても　餘りあり　にくんでもにくんでもまだたりない　中堅　中軍に同じ　太宰府　九州のまつりごとを行ふ役所

菊池武光

菊池氏は九州に居て官軍が衰へた時でも、ひとり勢があつた。武房は元寇の時に名を擧げ孫の武時は義兵を肥後に起し、博多の賊を討つて戰死し、その諸子も皆忠義をつくした。

武光の忠勤

一、武光は後村上天皇の御弟懷良親王を奉じて賊軍を破り、しだいに勢を加へた。

二、不忠不義な尊氏は菊池氏の强勢をおそれて、之を討たうとしたが病死した。

足利尊氏は後醍醐天皇の厚き御恩をうけながら、自分の野心からむほんをして、多くの忠義の人々を殺し皇族をさへ弑したてまつり、その惡逆・無道・不忠・不義はほんとににくむべきことだ。

筑後川の戰　菊池氏は勢强く武光は賊將少貳頼尙と筑後川で戰ひ大いに奮戰して敵をさんざんにうち破つた。

子孫の勤王

一、武光は頼尙を走らせて太宰府に入り京都に向はうとしたが、まもなく卒した。その爲に勢は衰へたが、その子孫は久しく朝廷の御爲につくした。

二、菊池神社は菊池氏一族の忠臣をまつる。

自習問題

(一)足利氏の內部次第にみだれしことにつき語れ。(二)細川頼之が足利義滿を如何にしてたすけしかを言へ。(三)後龜山天皇京都に還幸し給ひ、神器を後小松天皇に傳へ給ひし次第を語れ。(四)足利義滿が如何に奢を極めしかを言へ。(五)足利義滿の僭上なりし行につき語れ。

難語句

託して　たのみまかす　近侍　そばについてゐるもの　室町の邸　京都にある　三層の閣　さんがいのたかどの　僭上の行　身分をこえて上のまねをする行　御幸　上皇が外しになるのをいふ　明主　國王　ないがしろ　かろんじてちやうどないもののやうにふるまふこと

足利氏の僭上

尊氏は上は天皇に不忠のかぎりをつくし、身はその家もよく治め得ないで弟を毒殺し、部下も亦たがひに爭つた。

細川頼之義滿を助く

一、尊氏の子義詮が死ぬ時、子の義滿は年が十歲なので細川頼之に頼むだ。

二、頼之は足利氏の一族でつつしみ深く奢をとゞめわがままな大名をおさへ足利氏の基を固めた。

義滿の僭上

一、義滿は吉野に使を遣して天皇の御還幸を請ひ奉つた。後村上天皇の御子後龜山天皇は戰亂のために人民の苦しむのをあはれみ給ひ京都に還幸し、

第九十九代　後小松天皇に神器を傳へ給うた。(二〇五二)

二、義滿は征夷大將軍となり、又武家政治の世となつた。

三、義滿は將軍職を子義持に讓り强ひて太政大臣となり、室町に花の御所を京都の北山に金閣をたてて華美をつくし後、髮を剃つて尙政治をとつた。

四、勢にまかせて僭上のこと多く、自分の行列を天皇の御幸になぞらへた。

五、明に使をやつて交運を開いたが、日本國王の名をあまんじて受け、我が國體にきづをつけた。

自習問題

(一)足利義政政治に怠りしこと及びそれが爲に世の中の亂れしことを語れ。(二)應仁の亂の原因と戰況と結果とにつき言へ。(三)大亂後に於ける京都の有樣につきのべよ。(四)大亂中に於ける義政の行動につき語れ。

難語句

洪水(大水)　營(つく)み　相續(あとつぎ)の爭(あらそひ)　汝(なれ)の知(し)る都(みやこ)は野(の)べ…美しかつた京都のまちも兵火のために悉く燒かれて野原となり、朝夕にひばりあがるのを見ても誠に涙がでるといふいみ　燒野(やけの)(野火でやけた野原)　茶(ちゃ)の湯(ゆ)　こちや・うすちやなどをたてること　財政(ざいせい)　こゝでは幕府の收出をいふ

足利氏の衰微

義政政治を怠る

一、將軍義政は政治を怠り、奢にふけり、天災や惡病でくるしむ人民をかへり見なかつた。(第百一代後花園天皇の御戒めをうけそれでも花見の宴などを催して奢をつくした。

二、そこで幕府の費用が足らなくなり、人民から多くの稅をとりたてたので世の中が騷がしくなつた

足利家の相續爭

一、義政は三十歲で政治にあき、子がないので弟義視に職をゆづらうとして細川勝元に助けさせた。

二、義政は子が生れても義視を廢さないことを約束したが、義尙が生れて母は之を立てようとして山名宗全に託した。

三、足利氏の相續爭は細川勝元山名宗全の爭となつた。

應仁の亂

一、勝元・宗全は兵を各々京都にあつめ、勝元は室町幕府に、宗全はその西に陣をとつて十一年間爭ひ、二人共病死し兵は皆國に歸つた。(一四六七年)

二、亂の爲に京都は燒野となり、有名な建物の多くは燒かれた。

三、義政は亂の時でも奢をやめず、東山に銀閣を建てた。かくて財政困難となり幕府の命令はほとんど行はれなくなつた。

自習問題

(一)戰國時代とは如何なる世の中をいふか。(二)北條早雲は如何なる世の中をいふ模を奪取せしか。(三)北條氏綱氏康の共に武勇なりし事につき語れ。(四)河越の戰況につき語れ。(五)北條氏康がよく國內を治めしことにつき言へ。

難語句

聰明(すぐれかしこい)　乘(じょう)じてつけこんで　士民(武士や農民などをいふ)　鹿狩(しかがり)(しかなどをかりするをいふ)　城主(大森實賴)　和睦(わぼく)(なかなかいうちにもたたない)　いくばくもなく(どれだけいくさにじやうずであるのみでなく)　戰(たたかひ)に巧(たく)みなるのみならず　部下(ぶか)(じぶんのけらい)

北條氏康

戰國時代

應仁の亂の後は諸將は各々國に歸りたがひに相爭ひ、しかも將軍はどうすることも出來ず、英雄がきそひ起つてこれから百年間ばかり戰爭がたえなかつた。

北條早雲

早雲は當時に於ける群雄の一人で始めは伊勢新九郎といひ生れつき、聰明で東國の亂に乘じて伊豆をとり北條に居た。後小田原城をとり遂に相模を從へた。

早雲の子氏綱

氏綱は上杉氏を破つて江戶・河越の諸城をとつた。

北條氏康

一、氏綱の子氏康は幼い時は臆病であつたが、後には修養をして武勇の人となつた。

二、上杉朝定憲政等は河越城をとりかへさうとして之を圍んだ。氏康之を助けたが敵は大軍なので僞つて一時和睦し、油斷のすきをねらつて大いに破つた。朝定は戰死し憲政は越後の長尾景虎にたよつた。

三、氏康は祖父、父に劣らない智勇の武士で、戰爭が上手でなほ領地をよく治めたので人民が集り早雲から六十年ばかりで、伊豆・相模・武藏・上野等をその領地とし、その勢が大いに振つた。

自習問題

(一)上杉謙信の生ひ立ち及び其の武勇につき語れ。(二)武田信玄の生ひ立ち及び其の智謀につき語れ。(三)川中島の戰況につき述べよ。(四)上杉謙信の義氣に富みしことにつき言へ。(五)武田信玄及び上杉謙信は各〻どんなことを志せしか。

難語句

柔弱(じゅうじゃくよわいこと)　領主(りょうしゅ)の主(しゅ)　不意(ふい)に襲(おそ)ひてせめて　ある年秋(としあき)の戰(たたかひ)に十月の戰(永祿四年)　軍配團扇(ぐんぱいうちは)大將が軍をさしづするときにもちひたるもの　危難(きなん)あやうきなん　食鹽(しょくえん)しほ　義(ぎ)自分の利害をかへりみず、人のためにつくすことをいふ

上杉謙信と武田信玄

上杉謙信

一、上杉謙信はもと長尾氏といつた。爲景の二男で大膽で勇氣があり領地をよく治め近國を從へた。

二、上杉憲政が北條氏に追はれ謙信にたよつた。これより上杉氏を稱へた。

三、憲政の爲に小田原城に迫つたが何時も勝つた。

武田信玄

一、武田信玄は新羅三郎義光の後で幼い時から智謀深く十六歳の時父の勝てなかつた敵城を陷れた。程なく父にかはつて國をよく治め、しだいに信濃をとつた。そこで村上氏は謙信の力をかりた。

川中島の戰

川中島で兩雄が花々しく爭つたが幾度戰つても勝敗がつかなかつた。戰中謙信は信玄の領地の人民が鹽がなくて苦んでゐることを聞いて之に送つた。

謙信と信玄との大志

一、二人共京都に上り將軍を奉じ天下に命令しようと思つて居た。

二、信玄は駿河・遠江・三河へと進み國に歸る途中で死んだ。謙信は之を聞いて深く惜んだ。

三、謙信も越中能登を併せ大兵を率ゐて、京都に向はうとして出發のまぎはに病死した。

自習問題

(一)毛利元就の生ひ立ちと其の志とにつき言へ。(二)大内氏の忠節を說き、更に其のみだれたる有樣につき語れ。(三)嚴島の戰況につき言へ。(四)元就の勢力及び勤王心につき語れ。(五)毛利元就が三子を戒しめし事につき言へ。

難語句

大志(たいし)天下を平(たひら)げようといふ志　若君(わかぎみ)さす元就を　智勇(ちゆう)かね備(そなへ)り智恵と勇氣と二つなからをそなへてゐて　數箇國(すうかこく)筑前・豐前・長門・周防・安藝・石見の六國　忠節(ちゆうせつ)をいたせりちゆぎをつくした　おびきだし(だましてさそひだして)　大義(たいぎ)に通(つう)じ君主又は國家に對し臣として の道をよくわきまへてゐて

毛利元就

大内氏のみだれ

一、大内氏は周防に居て中國に勢をはり義興の時は數國を領して國富み山口は京都よりも賑つた。

二、義興の子義隆は朝廷が衰へ(第百四代)後奈良天皇の御卽位式の御費用がなかつたので之を奉つた。

三、陶晴賢は義隆が武備を怠り奢にふけつてゐるのを見て義隆を殺した。

嚴島の戰

元就は義隆の部下であつたが義兵を起して晴賢の大軍を嚴島で大いに破り遂こ晴賢を殺した。

元就中國に威を振ふ

一、元就は勢を得、周防長門をとり大内氏に代り出雲の尼子氏を亡し、中國・九州に十餘國を領した。

二、(第百五代)正親町天皇の御卽位の費用を奉つた。

三、毛利隆元・吉川元春・小早川隆景に三人共同して家運を計るべき事を戒めたが、隆元は父に先だつて死に、元春・隆景心を一にして家を助けた。

自習問題

(一)戰國時代に於ける公卿の困窮なりし有樣を語れ。(二)朝廷の御衰微せし有樣を言へ。(三)後奈良天皇が朝儀を再興し給ひしこと及び伊勢大廟を尊敬し給ひしことにつき述べよ。(四)後奈良天皇の御仁德につき語れ。

難語句

豪族(ごうぞく)　勢力の強大な家門をいふ
御料地(ごりょうち)　皇室の御所有の土地
面會(めんくわい)　おめにかかること
素肌(すはだ)　はだかのこと
築地(つきぢ)　どへい
再興(さいこう)　再びおこして
奉幣使(ほうへいし)　神樣にごへいをたてまつるおつかひ
經文(きやうもん)　おきやうの文のこと
萬民(ばんみん)　天下の人民
感泣(かんきう)せざらん　かんじてなくまいかなく

後奈良天皇

公卿の困難

一、戰國時代には北條・武田・上杉・毛利の外各地に豪族が起りたがひに爭ひ、さては諸國にある公卿・皇室の御料さへ豪族がおかすに至つた。

二、幕府も貧しく朝廷に御料をたてまつることが出來ず、公卿は緣をたよつて地方に下り京都に居るものは衣食にさへ事をかいた。

朝廷の衰微と天皇の御仁德

一、後奈良天皇の時には朝廷殊に衰へ、御所は破れ賢所の御あかしは遠く三條の橋から見えたほどで天皇の毎日の御用にすら事かき給うた。

二、天皇は乏しい御費用の中からなほ節約し給ひ久しくすたれてゐた朝儀をおこし給うた。

三、伊勢神宮のあれはてたのを御なげきなされ奉幣使をたてて造營し給ふことの出來ないことをおことわり申しあげた。

四、天皇はおなさけ深く、少しの貢物があれば公卿に賜ひ、人民に惡疫の流行したときは御自ら經文を寫し給うて、醍醐の三寶院に下し、わざはひを除かんことを御祈り申された。

大正十四年一月一日印刷
大正十四年一月五日發行
大正十四年十一月二十日訂正第三版

尋常小學國史附圖
第五學年

著作權所有

定價金參拾八錢

著作者　菊地勝之助
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地
發行者　立川熊次郎
大阪市東區和泉町二丁目三十一番地
印刷者　大阪印刷株式會社

發賣所
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四拾五番地　教育圖書出版社　電話船場一九四番　振替大阪一四六一番
大阪市南區安堂寺橋通井池南　立川文明堂
東京市神田區美土代町三丁目　富田文陽堂

尋常小學五六學年用參考書

奈良高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生序 中村源之介先生著
國語讀本 **學習カード** 五學年前期用 定價金參拾五錢 郵送料四錢

奈良高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生序 中村源之介先生著
國語讀本 **學習カード** 五學年後期用 定價金參拾五錢 郵送料四錢

奈良高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生序 中村源之介先生著
國語讀本 **學習カード** 六學年前期用 定價金參拾五錢 郵送料四錢

奈良高等師範學校訓導 秋田喜三郎先生序 中村源之介先生著
國語讀本 **學習カード** 六學年後期用 定價金參拾五錢 郵送料四錢

奈良女子高等師範學校教諭 松本龍之助先生選
全國兒童 **優良文集嫩草の卷** 五六年用 定價金參拾八錢 郵送料六錢

奈良女子高等師範學校教諭 松本龍之助先生選
全國兒童 **優良文集早蕨の卷** 五六年用 定價金參拾八錢 郵送料六錢

奈良女子高等師範學校教諭 松本龍之助先生選
全國兒童 **優良文集馬酔木の卷** 五六年用 定價金參拾八錢 郵送料六錢

奈良女子高等師範學校教諭 松本龍之助先生選
全國兒童 **優良文集石楠の卷** 高等科用 定價金六拾錢 郵送料八錢

西垣堯則先生著
新譯 **イソップ物語二百話** 定價金八拾錢 郵送料八錢

笹山準一先生著
新譯ロビンフン漂流記 定價金八拾錢 郵送料八錢

文明堂編輯部編
教訓お伽三學年 定價金五拾錢 郵送料六錢

文明堂編輯部編
教訓お伽四學年 定價金五拾錢 郵送料六錢

文明堂編輯部編
教訓お伽五學年 定價金五拾錢 郵送料六錢

文明堂編輯部編
教訓お伽六學年 定價金五拾錢 郵送料六錢

白井庫治先生著
熟語詳解 **模範自習辭典** 定價金九拾錢 郵送料拾錢

文明堂編輯部編
漢和字典 定價壹圓參拾錢 郵送料拾八錢

文明堂編輯部編
模範いろは辭典 皮製 定價金四圓 クロム製 參圓五拾錢 送料拾八錢 滿鮮六拾錢

文明堂編輯部編
入學試驗準備書 定價金八拾錢 郵送料八錢

發行所 大阪寺南橋安區三通 立川書店 振替口座大阪第一四六番

尋五中村

375.9
K

広島大学図書
0130458332